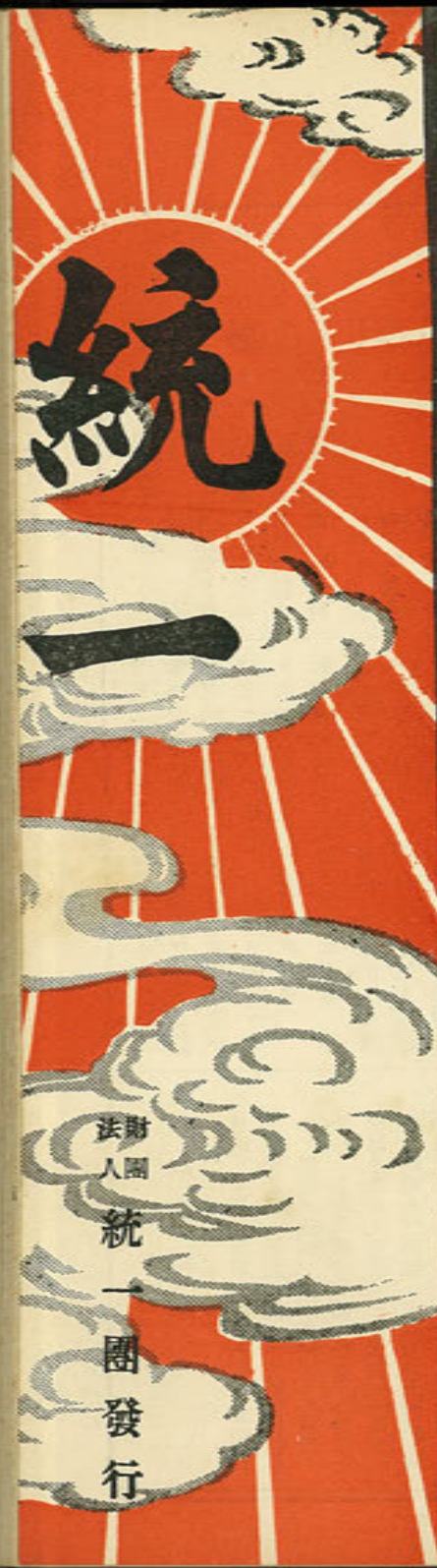


目 次

聖訓摘要	日生上人
日蓮教學講座(第十四回)	河合陟
日本精神運動と聖日蓮(下)	和賀義見
法華經講話(第十一講)	小林一郎
記事	
○團報と教信	
○寄附團費誌料願收	

第三十九年十一月一號

昭和九年十一月十一日發行
第百七十六號



統

一

法財人團
統一團發行

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法活動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

日生上人

法華初心成佛鈔

問て曰く八宗九宗十宗の中に、何か釋迦佛の立て給へる宗なる耶。答て曰く法華宗は釋迦所立の宗也其の故は已說今說當說の中には法華經第一也と説き給ふ、是れ釋迦佛の立て給ふ處の御語也、故に法華經をば佛立宗と云ひ、又は法華宗と云ふ。(縮刷遺文錄)

佛敎八宗、九宗、十宗あるの中に、どれがお釋迦様のお立てになつた宗旨であるかといふ問を設けて、答へて曰はれるに、それは法華宗がお釋迦様の立てられた宗旨である、その證據は法華經が三說超過と言つて、一切經の中に一番尊い敎であるからである。大體宗旨の「宗」といふ字はいろ／＼の義理もあるけれども、主なる意味は獨尊といつて一番尊い所を「宗」といふのである。丁度國家に於ける天子様のやうな意味であるから、一切經の中に於ては法華經は經王とある、諸々の經の中の王である、「經の王なり」といふことが即ち「宗」であるから、釋尊の立てられた宗旨は法華宗である、これが佛立宗で

あるといふことを言はれた。世間に八品佛立講といふものがあつて、南無妙法蓮華經を早題目といつて早口にジャブ〜やつて居るのがあつたが、あんなものは佛立でも何でもない、お釋迦様がお題目をあんなに早くジャブ〜唱へなければならぬといふやうな事は、何處にも説いて居らぬ、あんな事は愚な事である。眞の佛立講といふのは、法華經の前に申した二十の大事のやうなことを味はつて、それが精神意識に入つて信仰となつて現はれて、行は單純に南無妙法蓮華經だけれども、成るべくその意味合ひの能く消化れるやうにしなければならぬ。意味に何も知らないで宜いといふ事は間違つたことである、それは觀念法などいふ、さういふ行は要らぬけれども、教の意味といふものは心得なければならぬ、教の意味を知らなくても宜いといふ事は決してあるべきものでない。それは日蓮聖人が至る所に教へられて居る、大體「信する」といふ字は「したがふ」といふ字である、「したがふ」といふには物がなければならぬ、「お伴をして行きな」と言はれて、お婆さんに伴いて行くのか、娘に伴いて行くのか判らんで盲目ぢやないか、「したがふ」といふのは何に従ふのか、従はんとするに就てはちやんとその依る所がなければならぬ。南無妙法蓮華經といふのは、多くの場合唱へ言葉である、「伴いて行きなす」「伴いて行きなす」といふだけのことである。それは法華經の教があつて、本佛の人格といふものを説き示されて居る、それに従つて行くのである、人格無しに「伴いて行く」「伴いて行く」といふのは眞言風の南無妙法蓮華經である。眞言の萬有神教的の南無妙法蓮華經ならそれで宜い、何でも構はぬ、法華開

會といへば「狸でも狐でも皆法華開會ぢや」といふので行けば、それは萬有神教といつて宗教學の上に於ては最も劣等なものである。眞言は大體婆羅門から來た思想で、婆羅門といふのは印度の民族的の宗教である、印度にはお寺の柱などにいろいろの化物みたやうな物が澤山彫つてある、さういふ繪を見た人がありませうが、それを何といふ事なしに皆拜んで居る。今の法華宗の有様は恰度それである、鬼子母神様と言つたら鬼みたやうな格好をして居る、柴又の帝釋様と言つてもか、つたい坊みたやうな黒い顔をして居る、それを拜んで居る、皆婆羅門的のものである。左様なものは駄目ぢや。佛教は相からいうても三十二相八十種好と言つて、微妙なるものでなければならぬ、お化けみたやうなものや怖いものは絶対にない。大體釋迦の前にはあんな顔をした者は寄りつけない、釋迦は怖い顔をした者はお弟子になさらない、「衆生を教化するにはそんな怖い噂みつくやうな顔をした者は駄目ぢや」と言はれる、況んや神様や佛様が牙を剥いて居るといふやうなものは駄目ぢやないか、佛教は決してさういふものは採らぬ。成田の不動さんと言つても、眞ッ黒な顔をして、眼ばかりバチ〜して居る、椽の下の猫みたやうなものである、あんなものは佛教は大嫌ひである、佛教は實に三十二相、微妙圓滿なる者を理想して居る。

それであるからア、いふ意味にやつてはいけない、やはり法華經はその教の意味を以つて信仰しなければならぬ、然らざれば信すと雖も而かも信ぜざる者なりと日蓮聖人は言つて居る、「或は信じ或は服

すと雖も、一無間二無間、十百無間疑ひあるべからず」と言つて居る。唯だ口に唱へたならばそれで宜しいと言つたのは、佐渡已前の教である、『法華題目鈔』などには一期生の中に唯だ一遍で宜しい、二遍は多過ぎる、唯だ一遍なんど口ずさみ、義理をも知らず味ひも識らず、それで済むと言はれて居る。左様な教も日蓮聖人が言はれたけれども、それは佐渡已前の教で、佐渡已後の教としてはちやんと教の意義を了解して行かなければならぬのである。これに反對する者は全然間違つて居る、信仰といふものは隨喜といつて、『隨』とは『したがつ』のである、何に隨ふのであるか、隨喜功德品に『一念隨喜』といふ事が説かれて居る、『上の壽量品を聞いて佛の壽命の長遠なること是の如くなるを聞いて、一念も隨喜せん者は』とある、何も譯の判らぬ事を『聞くも聞かぬも無い、隨喜もへちまもない……』そんな事で信仰といふものが説けるものではない。先づ南無妙法蓮華經を唱へる前に、この隨喜の信念といふものが起らなければならぬ。前に御紹介した『四信五品鈔』に於ても、やはり『現在の四信の始めの一念信解、滅後の五品の第一の初隨喜』と言つてある。一念信解といふのは何であるか、初隨喜といふのは何であるか、それは天台の解釋に依つても日蓮の解釋に依つても、又お經その物がちやんと儼存して居る、隨喜功德品に『上の壽量品に説き給ひし事』とある。所が今の南無妙法蓮華經を唱へる人は、壽量品の内容がどうだの、その意味合ひといふものを少しも考へない者が出來て居る、これは非常な間違ひである、『唱法華題目鈔』などは念佛者に對する一時の言葉で、後に至つて皆改められて居る、あの

場合には本尊も未だ定まつて居らぬ佐渡已前の教といふものである。
 法華經に云く圓淨提の内に廣く流布せしめて斷絶せしめざらん等云々。瓊伽論には丑寅の隅に大乘妙法蓮華經の流布すべき小國ありと見えたり。安然和尚云く、我が日本國等云々。天竺よりは丑寅の角に此の日本國は當る也。又慧心僧都の一乘要決に云く、日本一州圓機統一にして朝野遠近同じく一乘に歸し、緇素、貴賤、悉く成佛を期せん云々。此の文の心は日本國は京、鎌倉、筑紫、鎮西、陸奥、遠きも近きも法華一乘の機のみ有りて、上も下も貴きも賤きも、持戒も破戒も、男も女も皆おしなべて法華經にて成佛すべき國なりといふ文なり。譬へば峴峯山に石なく、蓬萊山に毒なきが如く、日本國は純に法華經の國なり。(編纂遺文錄) 一六六七二

この所は法華經が日本の國に縁深いといふ事を證明せられたので、それには法華經の文と彌勒菩薩の『瓊伽論』の文、安然和尚、慧心僧都の言葉等を擧げて、一々日蓮聖人が解釋せられて、この日本國は恰かも峴峯山に石なく、蓬萊山の毒なきが如く、日本國は法華經に依つて信仰を統一すべき國であると言はれた。これは如何にも日蓮聖人の強い信念であつたと思ふのであります。『今でも中々こんな事は出來ないぢやないか』と言ふ人があるけれども、それは何でもないと私は思ふ。大體日本の宗教として

は佛教ならざるべからず、他の宗教は認めるにした所がマア附たりで、佛教が一番宜しい、佛教の中で法華經が宜しい、注華經の解釋では日蓮聖人が宜しい、斯ういふ風に三つか四つ判つたら一遍に行つ

てしまふぢやないか、何も難かしい事はない。「宗教は要るか要らぬか」「それは要る」「日本の宗教としてはそれが宜しいか」「佛教である」「佛教の中では何か」「法華經である」「法華經の意味はどれが宜いか」「日蓮聖人に依るが宜い」斯う来れば四日程の間に行つてしまふ譯である。それが何時までも行かんといふ、そんな腰抜けの事があるか、「大陣すでに破れたり、餘黨は物の數ならず」と言はれた通り、必ずや日本國は日蓮聖人の教に依つて人心歸一の日がある、又なければならぬ。恰かも今の皇室が八千萬の國民の精神を統一なさつて居るが如くになればならぬものである、徳川時代などに考へたならば、どうしてそんな事が出来るかと思つたであらうけれども、時到了たならば一擧にして王政復古して、今日は我が國民一人として皇室を戴かざる者はない。日蓮聖人は言はれて居る、一輪の花が開きかければ、日比谷公園に行つても花が咲いて居る、京都に行つても大阪に行つても皆開いて居る、左様なもので、時来れば花は一時に開く、「日本國一同に南無妙法蓮華經なるべし」と言はれて居る。何時までも今のやうな政治家がゴタ／＼して居る譯でもあるまい、何時までも教育者が困陋にして「宗教は要らぬ」ナンと言つても居るまい、判りかけた時分には「ア、詰らぬ事を昔は言うて居つた者もあつたものぢやさうな」といふ昔話になつてしまふ。聖徳太子のやうな方が出られて御覽なさい、何でもない事である、今の攝政殿下にあらせられた所が、日本の歴史を御覽になつて、「太子として攝政の位に在る者は、前には聖徳太子、中には中大兄皇子、第三は我れである、この三人は何を爲すべきかと

お考へになつたならばどうであるか。それはお考へにならんと極める譯には行かない、お考へになると極める譯にも行かんけれども、先づなるといふ方に考へた方が宜からうと思ふ。日本が何時までも譯の判らぬ者ばかり寄つてゴタ／＼やつて居るといふことはない、モウ好い加減眼を覺ますが宜しいではないか。それは日本の信仰統一の運動といふものは、壓迫する必要はない、信教は自由で宜しいけれどもその本が少しく定つて来たならば、やはり君子は風の如く、小人は草木の如きものであつて、一時に風靡してしまふものである、何もさう難かしいものではない。だから日蓮聖人が「日本は峴崙山に石なきが如く、蓬萊山に毒なきが如く、純に法華經の國なり」と言はれた、この信念は實に無かるべからざることであります。その代りにさうして行くには、法華宗自身がやはり能く教の意味を正して行かなければ、日本國全體の風教を法華經に依つて纏めようといふには、筋の立たぬやうな事では駄目である。今の所少々ぐらゐ信者が出来るの出来ないのといふやうな事は問題にする必要はない、一擧にして日本の風教を確立する迄この正しい物を擁護して行くのである、これが今日の日蓮主義者の任務である。少しばかりの信者が殖えても減つても、そんな事はどうでも宜い、それを左様な者の機嫌を取る爲めに教を狂げて、「ドンドコ法華でも構はぬ、五十人でも七十人でも捲き込んだが宜い」……そんな事は要らぬ事である。上佛祖の精神に對して一點も疵をつけないやうに、而して日本國が一擧にして上下擧つてこの大法を迎へる時を待つて、一時に櫻の花の咲くが如く行くのである、それ迄この法統を擁護するのが

お互の任務である、これは洵に光榮な事である。何も豆屋や團子屋ではあるまいし、數が多いとか少いとか、そんな事に依つてビク／＼する必要はない。

法華經を以つて國土を祈らば、上一人より下萬民に至るまで、悉く悦び榮へ給ふべき鎮護國家の大白法也。(一六八〇)

これは法華經を日本の文化の中心に打立てたならば、さうして國家を祈るやうになつたならば、上は皇室より下萬民に至るまで皆精神が温和になつて、隨つて精神の善い結果は社會の風俗も良くなり、總ての事が善くなつて行くのである。經濟の問題であらうが軍備の事であらうが、先づ人格の問題である先づ人格が良くなつて、詰らない今の様な觀念が除かれるやうになれば、全く日本の國は榮へて、日蓮聖人の言はれる通り「悉く悦び榮へ給ふべき鎮護國家の大白法なり」で、日本國民が上朝廷より下萬民に至るまで、變てこな事をやめて、さうして一舉に南無妙法蓮華經を唱へたならば、モウ危険思想や、社會主義や、そんな者は一遍に飛んでしまふ、南無妙法蓮華經の三通も言つたならば皆飛んでしまふ。「サア愈々國家の一大事が起つた」といふ秋にも、先づ日本の國民が一致協力して南無妙法蓮華經を唱へてやつて行くならば、どんな壓迫が來ても之れを弾き返すことが出来る。それで人心を纏めて行くには、どうしても一ツ宗教がなければならぬ。今迄も實はそれで來ただけけれども、今のやうに思想が紛亂して來るに就ては、やはり法華經が大いに働かなければならぬ、今迄は唯だ日本の歴史といふ歴史觀

念で濟んだだけでも、今後はさうばかりいかぬ、思想の内面に入つての闘ひであるから、この時に方々は法華經が飛出して、大いに働かなければならぬのである。

今の國主も又是のく如し。現世安穩、後生善處なるべき此の大白法を信じて國土に弘め給はば、萬國に其の身を仰がれ、後代に賢人の名を留め給ふべし。(一六八一)

日本の國主がこの法華經の爲めに御盡しになつたならば、日本の國を安泰になさるばかりでなく、その徳が世界に及び、後代に及んで非常な立派な名譽をお擧げなさる譯である。畏くも今の攝政殿下は英明であらせられるといふことでありますから、どうか佛教の復活といふ事をお考へになり、その佛教の復活については法華經中心といふことは最初聖德太子もお定めになり、桓武天皇に依つても明かになつて居る、その後一時紊れたけれども、その間七百年は朝廷の御威光が衰へて居つた。明治維新の宏業と共にこの大事は爲さるべきであつたが、當時輔弼の人達が佛教の事に盲目であつたが爲めに、斯様な事に相成つたのである。その元老の山縣さんも遂に薨去せられたから、今や幕の開くべき時が來たのである、段々あゝいふ人が死んで行かれるといふことも、一方からいへば歎きであるが、一方からいへば悦びである。それは幕がかはるのである、何時までも排佛論の頭腦がひつ付いて居つて、これが長生きをしたものでは堪つたものではない。モウ考へ直さなければいけない、國家の爲めに、この國民の思想が斯の如く成りつゝある、之れを引締めて鞏固な觀念に戻すといふには、唯だ一と通りの學說議論ではない

かぬ、非常に卓越したる宗教の信仰に來らしめ、法華經の如き信念を與へて行くならば、國も榮へさうして遂に世界に名譽が擧つて行く譯であります。だから日蓮聖人が、その當時の國主が、どうぞこの法華經に依つて萬國に譽れを輝がし、後代に名を留め給ふやうにといふ事を申されて、傳教大師と桓武天皇の如き關係を理想せられたといふ事は當然の事であります。今でも日蓮主義者に左様な人が出たならば、どうか今度の攝政殿下の御代に、それは攝政治下の場合でも、又は天子様にお成りになつてからでも宜しい、三年や五年は急ぐ譯でもありませんから、どうか御存生の間には聖徳、桓武の昔の様に、日本を法華經中心の文化にして戴きたいといふのは、日蓮主義者の願ふ所でありませう。

譬へばよき火打と、よき石の角と、よきほくそと、此の三つ寄り合ひて火を用ゆる也。祈も又是くの如し、よき師と、よき檀那と、よき法と、此の三つ寄り合ひて祈を成就し、國土の大難をも拂ふべき者也。(維新遺文錄)

これは三つの物が寄り合つて祈を成就するといふ事を仰せられた有名な一節であります。この譬が非常に面白いので、燈金と燈石と火口と、この三つが揃はなかつたならば火は鑽れない、今は燐寸でちよつと擦れば譯はない、けれども昔は皆燈金で燈石を叩いて火を鑽つたものである。日蓮主義者の祈りもその通りである、この『祈』といふのは何を指して居るかといふと、即ち鎮護國家の祈である、前にあつた『法華經を以つて國土を祈らば』といふこの愛國の赤誠より出で、日蓮主義者共通の祈といふも

のは、一方には立正安國、一方には皆歸妙法である、小にしては日本の國の立正安國、大にしては四海の皆歸妙法を理想して居るものである、廣宣流布の大願に貢献しなければ熄まぬ。丁度日本の建國の精神が、何處までも所謂天下を光宅し、威を八紘に振ふといふ事を考へたと同じ事に、日蓮主義者は立正安國と皆歸妙法といふ事を子々孫々に傳へて行くものである。だからそれを成就するには、よき師とよき檀那と善き法の三つが揃うて行かなければならぬ、善き法としては法華經は今日現存して居る、よき師と言つてもさう面倒なものではない、この抽出した文章の續きに書かれてある所に依れば、世間の大したる過失なくして慈悲ある人で、法華經を經文の通りに弘める人であつたならば、それで宜しいといふ事になつて居る、よい檀那といふのも金持でもなければ賢い者にも限らん、真心を以つて法華經を信仰する者は皆これよき檀那なりと仰せられて居る。この三つの者が寄り合つたならば祈を成就することが出来ると言はれた、これも大事な事である。火を鑽らうとするには火口が濕つても火は取れない石の角が丸くなつてしまつても火は出ない、又燈金の銅の所が無くなつて鈍らになつても駄目である。所が今日はこの三つが三つ共壞れて居ると云つて宜しい、火口は濕つて居る、石は丸くなつて居る、金は鈍らになつてしまつて居るといふやうな譯であるから、何度やつても火が出ないのである。モウ少し日蓮主義は緊張して來なければならぬ、それが爲めには現在のドンドコ法華に對して大革新を促さんければいけない、けれども物の前後といふものは、どつちが早いか分らない、寧ろ社會の相當なる知識あ

る方面の方が早く了解するかも知れない、この古いドンドコ法華といふのは、教育も無い人が多いためではないかと思ふから、それを直すのには或は暇が要るかも知れない、けれどもこれはどうしても一つ日本風の爲めに大いに研究しなければならぬ事である。モウ日蓮主義の教義が宜しいとか、組織が宜しいとかいふやうな事は問題にならぬ事である、唯だ之れを如何に發揚し、如何に日本の風教の上に押し出すかといふ事が實際問題なのであります。



日蓮教學講座 (第十四回)

文學士 河合 陟 明

★★★★★
 是の如き諸の菩薩 神通大智力有り、四方の地震裂して 皆中より涌出せり。
 世尊よ 我れ昔よりこのかた未だ曾て是の事を見ず、願はくは其の從ふ所の國
 土の名號を説きたまへ、我れ常に諸國に遊べども、未だ曾て是の事を見ず、我
 れ此の衆の中に於ては乃し一人をも知らず、忽然に地より出でたり。無量徳の
 世尊よ 唯願はくは衆の疑を決したまへ。
 (妙法蓮華經從地涌出品) ★★★★★

本講座に於ける佛陀の人格に對する論稿は、筆者少しく考ふる所あり、暫く之を後日に期し、今は日蓮聖人及びその門下
 幾多の教條によれる、『法統愛護』と『國體名分』の思想的事實に關して、聊か述ぶる所あらんとす。讀者敢て咎むる
 こと無くば幸なり。

皇國日本と日蓮聖人

序 說

人類が地上に出現してより幾星霜、洪荒極まりな

き原始時代より、漸く次第々に文化を形成し來れ
 る有史時代に入りてよりこのかた、地の東西に亘り

時の古今を通じ、大小幾多の國々が隆替興亡を繰返しつつある中に、獨り卓然として立てる一大帝國がある。

東、太平洋を望み、西、アジア大陸を抱き、南より北に、飛龍の雲を衝くが如き形を成せる一大威容、その名を——皇國「大日本」といふ。

今、世界史と世界の地圖とを擴げ見よ。地球上最も形勝の地を占め、史上唯一の天皇を奉戴し來りし萬世一系の國、ゆるぎなき國土の礎に安らふべく、精神、物質、あらゆる文化が朝宗し來れる國、曾てはアジア大陸の文明も東漸した、近くは西ヨーロッパの文明も東漸してゐる、或は東太平洋を渡つてアメリカの文明も入り來りつつある。人類の地上に、何物か一大事を約束すべく聳え立てるが如き聖國ではないか。

古來、幾多の聖賢英豪が、この國土に育まれ、この國土を護り、而てこの國土に歸した。光榮なるこの

合一貫し、今はまた東西文明を開顯統一すべき、皇道精神の本流に棹しつゝ、日本文明の正統を任持して立てる、思想界の一大巨人がある。承久の逆亂の翌年に生れ、弘安元寇の翌年に寂せる——内外もろとも祖國大國難の非常時に際し、護國の衷情、護法の覺悟、豫言警告、忍難殉教、悲壯凛烈一代の生涯、至誠やみまもあらず「立正安國」の大誓願を以て「涙を湛へつゝ、鞭てる聖者」毅然として心靈界を睥睨し闊歩したる一大巨人、その名を——聞け、日蓮聖人といふ。

皇國日本と日蓮聖人！

おゝそのリズムの微妙の調和よ、我等が信仰し、我等が敬慕して止まざるこの靈的巨人、國土日蓮にして、大宗教家日蓮、現實と理想との二面を統一したる一大人格。法界（宇宙）根本の一大本佛に熱火の信仰と血涙の感激を捧げつゝ、靈界久遠の光明を掲げて

國土を守れ、卿等よ、卿等の祖國を愛せよ。

愛國——護國、その護國の事實とは何か。

人生には——人類の歴史には常に二つの時代がある二つの姿がある、それは平時と戦時とである。一朝有事の日に、干戈を取つて皇國を護るは、武的護國である、軍事的愛國である。然し平時に於ては、その背景として、經濟的護國がなければならぬ、産業的愛國がなければならぬ。更にもう一つある。人間の行爲は、先づ心より發して身に之を行ふ、その精神の根本に於ける護國、それが思想的愛國である。三者は、何れの一をも偏廢すべからざること鼎の如きものである。然しその順序は、精神、思想、そのものを中心とすべきは、論ずるを待たないであらうひるがへつて思へ、

皇祖 天壤無窮の神勅を承けて 神武天皇の肇國以來、こゝに二千五百九十四年、この久しき祖國の歴史に於て、多年傳持し蓄積し來れる神儒佛三教を融

大願を立てん、我れ日本の柱とならん、我れ日本、本、の眼目とならん、我れ日本の大船とならん、等と誓ひし願やぶるべからず、

と誓ひし一代の聖者、護國の柱、祖國の守、祖國日本、の典型的人格。

宜なる哉、今上陛下が、思想的愛國の活模範として國民精神の一大先覺者として、先に攝政の御時「立正大師」の證號を追賜せられ、大正十一年十月十三日、日蓮聖人入滅の日、更にその後十年、まことに日蓮聖人六百五十遠忌の佳年に當り、即ち昭和六年十月一日、再び「立正」の勅額を我が門下に賜ふに至りし、その甚深の聖慮をそも——何と見奉るべきであらうか。

祖國史上の未曾有の國難に際し、一片皎々の赤心を以て「立正安國」の大事を叫びし、日蓮聖人の人格事蹟、主張、信仰、かの聖者は、その國難の、如何なる——社會的、思想的——時代に生れ、何事を爲

し、何事を叫び、而て如何にその生を終つたのであるか。

その六十一年血涙の生涯、あだかもまさしにその咽喉と結尾とを、内、國體史上隨一の大逆と、外、他國侵逼の累卵の危機とに——然り全く國家的二大事業に運命づけられて展開したる一生、そもく「すめらみくに」——「すめらみことの道」——「すめらぎの民の道」と、いかに相觸れ相映じ相發したことで

第一章 日蓮聖人出現以前の國情

抑も日蓮聖人の皇國史上に於ける意義を論ぜんには、その出現當時否その以前よりの我が國情より説き出ださねばならぬ。

大聖釋尊の明教が、由來する所深き神祕の默契を辿り來りて、大乘純圓の我妙國に入り來りてより欽明・敏達・用明・崇峻の四帝を経て、推古の朝、

し開族蠶我等の、皇室をすら危うせんとするに至れる大逆の道徳を根拔すべき、一大國家革新の先鞭として、儼然として「一君萬民」の大義名分を教へたまひて、こゝに文化と名分と兩々相俟つて、國體開顯の端を開きたまひてよりこのかた、鎌足、清應、傳教、弘法等の義人賢哲を經來りて、その深旨は一面に於ては益々鮮かに發揮せられつゝあつたが、平安朝の中葉以降、上は皇室に於ける思想信仰の紊亂と伴つて、下に法然・親鸞・榮西・道元等の、唱へ出せし佛敎觀は、漸く最初傳來當時よりの國家指導の大精神と教義とを拂拭して、單に末法の人生苦世界苦を超越ないし逃避せんとする、個人主義的、自然主義的、或は唯我獨尊的、或は薄志弱行的、一種歪曲されたる萎縮的思想として、然も靡然として社會に瀰滿するに至り、王法・佛法兩つながら、その本義を失墜し果て、皇國史上の危機的思想と史實とを演出したる「國難時」に當り、遂に撥亂反正

あつたらう。悠久なる皇道と日蓮聖人の大神精神とはそもくいかなる神祕の約束を擔ひ負うてゐるのであらうか。
吾人は今やこの事に就て語り、而てその特に祖國に齎せる意義、感化、將來的豫言と建設とを尋ね、ひるがへつて昭和今日の國民が、こゝに何物かを把握する所あらむことを庶幾ふのである。

聖德太子は、天與の偉材を以て皇國日本の一大文化理想を掲げたまひ、神儒佛三教一貫の皇謨を明かにし、特に「佛法は神史の玄幽を説く」と稱せられ、就中、法華經を以て「鎮護國家の妙典」としたまひ自ら廟堂に此經を講じさせたまひ、而も亦他面深く時勢に鑑みたまひて、かの崇峻天皇を弑逆し奉り

の大巨人を産出して、紫電一閃、快刀亂麻を斷ち、佛敎本來の國家的大理想を復活し、否しかのみならず、國體開顯の眞義を究極し、靈界最尊の無上道を教へて、人類永遠の大光明を掲げしものが、實に我が、日蓮聖人その人であつたのである！

蓋し日蓮聖人の國體觀は我が皇道の心髓を會得して、その抱負もまことに雄大なるものであるが、それは聖人が印度・支那・日本三國二千年に亘る佛敎史上、前賢未發の大教義を樹立せられたる事にも由るのであつて、聖人が「法を知り國を思ふ」と叫ばれたることは、胸中實に鬱勃たる深き思想と感激との迸りであつたのである。而して聖人はその教義と共に國體觀に於てもまた先賢の未だ達せざりし所に達して、その不備を完成せられてをる。

蓋し傳教や弘法は亦固より神儒佛三教の調和を圖り、殊に佛敎の深き思想より國家を觀せんとせられたのであるが、支那・印度に比ひなき日本皇室の御

後威や肇國の理想、歴代の御聖徳などについては未だ十分に之を見ずして、寧ろ日本といふ國はやはり普通の國、否却つて東海の邊國であるといふ見、印度や支那は大國にして文明が進んでゐるといふ考へよりして、國體に對する熱誠や確信が未だ徹底し居らざりしが如くである。思想文明に於ける先進國の壓力に打たれて、十分に自國の本然の姿——獨特の面目を反省し自覺するの餘裕がなかつたものといわねばならぬ。これは何れの時代にもよくある事で、今日のいはゆる哲學者達も、殆ど未だ西洋心醉の眠より醒め切れてゐない、國體の尊嚴も國家觀念も到底十分に認識してをらぬ、キリスト教徒もまた然り、マルクス主義者の如きに至つては、今更論する價值すらないのである。もちろん傳教や弘法の二賢は、これらとは遙かに選を異にし、國體觀も相當深く、國家の經綸も立派なものであつたが、而も尙右の如き不備なる點を存せしことは遺憾なる事實であつた。

さてその後比叡山を中心としたる日本佛教の趨勢は果して如何なりしやといふに、時代の變遷に伴つて佛教は次第に分化し、眞言宗・念佛宗・禪宗・律宗等、種々の新しき宗派が起り來つた。これらは思想信仰の或點では發展ともいひ得るであらうが、さりながらそれは裏面的・側面的觀察に過ぎないのであつて、實には皆悉く佛教の正系より逸脱したるものといはねばならぬのである。而てまた他國國體觀念の方も一層稀薄になつて行つたのである。即ち信仰上に於ては、曾て傳教大師が桓武天皇の勅命を奉じ、法華經を以つて一度は佛教の統一を實現せられたのであるが、その大乘圓教の思想が次第に不圓融の分裂的思想に蝕まれて、淺薄低級なる信仰に陥つて行つた。殊に大恩教主釋尊を捨て、みだりに他方他佛に走り、一王一佛の大憲法に反して、精神界の分裂を呈し來つた。たゞ受け容れ易く信じ易いといふ點のみをとつて、大切なる信心をきめて了し、現

實を離れて迂遠なる事に向ひ、現世を放擲して死後來世の事のみを考へ、自分だけの安心を得ればこれで満足してしまふ、或は人倫綱常を輕んじて一切の世事を空してしまひ、はたまた自己一身の戒律に專念して一國一家の大事を知らず

し、宗教進化の理法となすのである。しかるに彼の諸宗は、曾て傳教大師が日本人の腦裏に植るおかれたる法華經中心の統一的佛教觀よりも、却つて猶ほ淺くして劣れるものである。念佛宗の法然・親鸞や禪宗の榮西・道元などは、元來菩薩的・進取的・向上的にして醍醐一貫の醇味を嘗むべき法華經の機(宗教心理)なる日本國民に、却つて粗末なる穢食を與へ、加水の乳を飲ましむるものである。これは必ず民族の意氣の沈滞、道念の低下、國家團結力の弛緩に伴ひ、且つこれを一層助長するものであつて、これを憂ひ且つ救ひ得るものにして始めて眞の知者であり、思想家の資格を具へたるものといふことができるのである。

これらは皆それ／＼一小部分の民衆の要求に應ぜんとして、佛教全體を達觀することなく、豊富なる佛教思想の一角を切り取つて、その時代——その社會狀態の、各一面に單なる局部療法を施したるものである。國家の特性や民族の本質、また人類の普遍的要求や價值などは更に考へてをらないものである。しかも思想が國家社會に及ぼす影響ほど顯著なるものはない。これら種々の信仰はあだかも燎原の火の如く、上は朝廷より下は一般民衆に至るまで、我國中に蔓りだした。凡そ教なるものは次第に淺きより深きに進み、常に前よりも勝れたものを與へなければならぬのである。これを『教法流布の前後』と稱

さりながら宗教思想の如き高遠なる問題は、尋常一様の考へにては到底その正邪優劣が解るものでない學者すら猶然り、況や一般大衆をや。殊に朝廷に於かせられても、眞言宗の信仰には、深

く心を寄せらるゝに至つた。それが抑もその教義的
 根本に於て、釋迦、大日の二佛を並び立つる思想に
 して、心靈界の大問題たる佛教信仰の統一、國家の
 現實的重大事たる一王一佛の大義名分に悖るものな
 ることを、深くお氣付きにならざりしか否か。否眞
 言の弊害はそれのみでない。抑もこの現實界に出現
 して親しく我等を救済したまへる大因縁ある釋迦牟
 尼佛を、物もあらうに『無明の邊域』迷へる田舎者
 として賤しめ、別に大日如來を立て、ひたすら之
 を奉じ、我が主を捨て、他の主に就く。これ何たる
 反逆であるか。果せる哉、醍醐・村上の兩帝、延喜
 天曆の御代よりこのかた、皇室に於かせられても悲
 しむべきことには、皇統を繼がせたまふ太子のこと
 に就きてはしばし問題が紛糾し、また我國統治の
 大権の一變態たる、然りあだかも一國二王の偏を爲
 せる院政の弊も漸く出て來りて、遂に保元・平治の亂
 の如きは、二王相争ふの不祥事を惹起し、或は更に

後に持明院統、大覺寺統なる兩統迭立つる時代を生
 み、ひいては更に南北兩朝の分裂となり、天下麻の
 如く亂れて人心歸する所を知らなかつた。これ皆そ
 れ、その歴史的事情の存せし所とはいへ、而もそ
 の史實の根底に横たはる大義名分の頽廢を思ふ時、
 抑も思想信仰の正邪曲直がいかにかに國家社會に及ぼ
 す影響の大いなるかに、吾人は慄然として感慨に打
 たるゝを禁じ得ないのである。
 (續)

日本精神運動と聖日蓮(下)

和賀義見

六、大化改新以降の世の變遷
 中大兄皇子は藤原鎌子、蘇我倉山田石川麻呂等の
 共到大極殿に於て蘇我入鹿を誅せられた後、法興寺
 に立籠つて蘇我氏の逆襲に備へた。

將軍巨勢德太は兵を率ひて蘇我氏の邸に向つた。
 蘇我氏の軍勢は之を見て早や戰の火蓋を切つて放
 さうとした。時に德太は諄々として大義を説き、臣
 として君に叛き私に戰ふべからざる事を諭したので
 一同名分を知り門の圍を解いて三々伍々退き去つた
 兵勢已に戰意無く名分を知つて蘇我氏の專横の走
 狗となるに屑とせざる軍勢から見捨てられた蝦夷は

遂に邸に火を放つて自刃した。

南淵請安、僧旻、高向玄理等の
 養成せる英才であつた。共に大化の新政に參畫して
 皇子の事業を助けたのである。それより後大實、養
 老の律令の制定を見るに及んで國家、經綸の基礎漸
 く堅く政道の形式甚だ整ふに至つた。

乍然養老年間早く莊園の起源とも見らるべき文
 獻を遺しその後御名代、御子代、親田等の續出する
 に及んで私有の地は次第に多くなつて來、總て權門、
 豪族の間に土地の兼併が盛に行はるゝやうになつて
 來た。奈良朝時代より桓武天皇並に平安朝時代に入
 つて屢々土地兼併の禁令を諸國に發せられてゐる。

然しながら泰平に馴れ榮華の夢に酔ひつづれた公卿は地方人民の苦しみも、阿倍比羅夫や坂上田村麿が如何に拓殖の爲、又強剛なる夷俘の征服の爲に辛酸せられたかの勞苦を忘れ風月を友とし歌謠に耽りつゝある間に漸く地方豪族の興起を促し、國司は任を終へて尙京都に歸らず、中央の權勢と結託せる領家なるもの續出し、更に京都に志を得ざる人々は地方偏狹を開拓して勢力をその地に扶殖し武家發生の起源を爲したのである。

大化改新の制度に依る經濟組織は次第に毀れ租庸調の稅制又亂れ朝廷式微の素因は斯くして不知不諫の間に蕃殖したのである。

されば地方豪族の勢力は甚だ容易ならざるものがあつた。安倍氏を降服せしむるに、源義家父子が朝命を奉じその勇武を以てして尙九年の歲月を費し清原の一族を鎮むるに三年を要し、然も常に地方豪族の力を藉りて漸く鎮定することを得たのであつた。

藤原清衡、基衡、秀衡三代の榮華は奥州平泉の文化を生み

夏草やつわものどもが夢の跡

の一句に今昔の感を深くせしめる。

五月雨の降り残してや光堂

芭蕉の遺懐に見るが如く當時平泉の文化は當代の粹を集めたもので今尙その名残を金色堂に止めてゐる。

斯くの如く地方豪族の興起と共に中央の文化は漸く地方に移された。平家一門の安藝の宮島に於けるが如きもその一例である。斯くして頼朝が幕府を鎌倉に開くに至つて完全に支配の實權は武門の手に握られた。

頼朝は大江廣元の進言を入れて諸國に守護、地頭を置き田一反當り租五升を徴して鎌倉幕府財源の基礎を築いた。此處に政治經濟軍事等諸般に涉つて大化維新の制度組織は武家中心の封建制度に依つて置

き換へられたのである。蓋し日蓮聖人が

『日本の國代初まつてより謀叛のもの廿六人第廿五人は、源頼朝第廿六人は北條義時なり』と言つて頼朝を以て謀叛の者と斷定を下された所以のものは實

に天皇統治の實權を臣下の手に移し、大化維新に依る制度組織を完全に覆滅して封建の制を樹立せる點にあつた。如何に頼朝鴻業あり且又後白河院の御惱にかゝらせ給ひし時鶴ヶ岡八幡に法華經を讀誦して御平癒を祈り奉つたことに依つても知らるゝ如く、朝廷に對し常に敬虔の念を失はなかつたと辯護しても、最も重大な國體觀念の核心を逸したると、並びに天皇の大權を犯したる點に於て茲に驚くべき事蹟は下され鎌倉幕府の勢力最も高調せる時に於て憚る處なく大聲叱呼、國體大義の名分を正されたのであつた。

日蓮聖人の活眼には頼朝の鴻業あるを以つてして尙斯くの如くであるから北條義時に至つては斷じて

許さるべきではない、『權ノ大夫は民ぞかし、穩岐の法王は天子なり、民として君を仇まんをば、天照太神、八幡大菩薩受け給ひなんや』と憚る所なく直諫を試みたのである。

斯の如き日蓮聖人の主張態度は、南朝の忠臣北條親房卿が神皇正統記に『頼朝高官に昇り守護の職を給ふ。これ皆法皇の勅裁なり。私に盜めるとは定め

がたし。後室その跡を計らひ、義時久しく彼が權をとりて、人望に背かざりしかば、下には未だ庇ありと言ふべからず。一往のいはれ許りにて追討せられんは、上の御科とや申すべき。謀叛起したる朝敵の利を得たるには、比量せられがたし。かゝれば時の至らず、天のゆるさぬ事は疑ひなし。但し下の上を剋するは、極めたる非道なり。終にはなどか皇化にまつらはざるべき』と論ぜられてゐる事と對比して聖人が如何に直裁明斷、神皇正統記より一步を進めたる國體正義を高調せられたものであるか知られ

ることは憂國の識者の熱慮を要する處であらねばならぬ。

七、佛教の變遷

斯くの如く時代は遷り國家社會の制度機構は變り行く。世の動向はその時代の人々の持つ思想に制約せられる。その時代思想なるものは人生觀、宇宙觀乃至超人觀等の宗教觀に緣由する。そしてそれが信心といふ相で總ての階級に織り込まれて行くものである。故に我等は重ねて國民精神の指導を擔當せる佛教の變遷に言及しなければならぬのである。

奈良朝聖武天皇の御世、諸國に國分寺を建て、國民教化の道場となし文化開弘の機關たらしめると同時に、佛教徒の非行を正しうせんが爲に僧正を置いて之を取締らせたのであつた。その後桓武の朝都を平安の地に遷さるゝや、傳教大師は法華經を都の四方に埋め、九條の袈裟を擲けて都市計畫を助け、國

民皆菩薩の新教化を起した。傳教大師は山家學生式に「能く言ひて行ふこと能はざるは國の師なり、能く行ひて言ふこと能はざるは國の用なり、能く行ひ能く言ふは國の寶なり、言ふこと能はず行ふこと能はざるを國の賊と爲す」と言つて國寶を人に求め、人に依つて國を守り國家の理想を達成せんとしたのである。而も人材を得國家の理想を達成せんに正しき明教に依りて指導せられなければならぬ。

「夫れ一如に範衛して以て化を流くものは法王なり四海に光宅して以て風を垂るゝものは仁王なり然れば則ち仁王と法王と互に顯して物を聞き眞諦（佛法の事）と俗語（世間の事）と遷に因りて教を弘む」と言つて王法と佛法の離るべからざることを強く教令したのであつた。

然しながら佛教に従へば最初にも之を述べた如く正像末の三時があつて正法の時は佛の教は精神的にも形式の上にも激烈たる生命を持つて居るが像法の天台に二つの流れを助成せしむる分岐點に立つものであつた。一は法華中心の佛教であり二は念佛往生の佛教それである。回顧すれば奈良時代の佛教は消極的な小乘乃至階級的な色彩を強く持つ權大乘の教であつた。

法相宗の如きすら「決定性、無性有情」等と言つて決定論に立脚した思想即ち生れ乍らにして此の人生に於て約束せられた軌道を辿るより外には如何に努力してもその域外に出づることを許されぬといふ思想や、全然佛性を認めざる衆生を此の世界に肯定するが如き差別的な思想を持つものであつたから自ら特權的な色彩を持ち庶民階級の血となり肉となる所へは達し難かつたのである、此の時代かうした階級的な風潮から超脱して佛者の心境に投げんとした沙彌佛教は、僅に時代の要求する一面の意義を持つものであつた。

時代になれば形式は保たれてもその精神は大第に失はれて行く、末法に入るや佛教は形も心も共に亂れて、正しい教は穩され、大本は顧みられず、枝葉のみが蔓り茂る時代となるのである。斯る時代には之を傳へる僧も墮落し之を外より護る權越も又その人なきに至つて、遂に佛法は滅盡せんとするに至る。

傳教大師は之を憂へ末法甚だ近きにありと言ひ「末法燈明記」を著して佛教擁護の大教令を發したのである。然るに日本天台の教は二代義眞の後、慈覺、智證眞言に心を寄せ漸く繁雜に流れ傳教大師の雄圖は大第に掩はれ眞言の天台となり下つたかに見らるゝ程になつた。斯くして時代はいよゝ末法に還り行くのである。

然し平安朝時代の燦然たる文化は法華經文化と言つて更に過言でない程であつた。

惠心僧都は檀那僧正と共に中世天台に於ける名匠であつたがその著「一乘要結」と「往生要集」とは

大佛敎を法華經に見出し、尊も卑も盡く佛陀理想實現の闘士として皆菩薩たらしめんとする大敎化を樹立したのであつた。然るに慈覺智證以後次第にその雄圖は穩され天台眞言の敎は觀念の理談となり、形式の偶像化せるものとなつて、世の上層にありて風月を友とする長袖の間に伍し、莊大なる殿堂の經營に之疲れ、魂を逸したる形式は固定化せる盲信となつて、祈禱三昧に憂身を憂すやうになつた。

斯様に民衆の血となり魂ともなるべき宗教が、實踐を離れた空理に憧れ、固定化せられた偶像に墮し特權的なる僧團の維持に腐心してゐる間に餌取法師と稱する一類のものが現出するやうになつた。

彼等は罪惡に満たされた莊嚴なる殿堂に住することを愉しとせず、草の庵を結んで下層の庶民の間に佛陀の福音を傳へ自らは山野、屠殺場等に捨てられたる獸肉等を食し人間的な中にも聖の香の漂ふものある者が次第に多く現はれて來た。

飢饉の爲、糧食地方より集らず、その慘狀は名狀すべからざるものあり、饑卒累々として巷に斃れ加茂川以内にて已に屍四萬二千三百と算せられた。平家は源氏討伐の兵を養ふ糧食に窮した。園城寺、興福寺、東大寺等は燒き拂はれた。熊野、吉野の僧徒は僧團維持の爲兵杖を執つて立つ、四方に掠奪が行はれ、強盜は横行する、天變地天は頻りに至る。斯る悲惨の狀態は承久亂以降に於て更に甚だしきものがあつた。立正安國論の劈頭に、日蓮聖人慨

世の聲を聞け。
 『近年より近日に至るまで天變地天飢饉疫癘遍く天下に滿ち廣く地上に迭る、牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超へ、悲しまざるの族敢て一人もなし』と。以て當時の慘狀が偲ばれる、であらう。

利へ内に内亂あつて名分は地に墮ちんとし、外に蒙古襲來の大難あつて、國家は風前の燈の如く、危

茲に惠心僧都往生要集の思想は更に發展して法然上人や親鸞上人を生むに至つたのである。

殊に親鸞は自ら肉食妻帯して最も人間的な宗教を強調したのである。此の反對に固く禁戒を守り工夫鑽究して本來の面目を覺らうとしたのが新來の禪宗即ちそれである。

斯くの如く幾多の變遷を重ねた佛敎運動も、結極は眞の佛敎の廣まるべき前提を爲すものであつた。愈々本門の大敎が顯れて、末法を解決するの時が來たのである。茲に聖日蓮出現の大因縁がある。

八、立正安國の大難

頼朝が平家追討の兵を起し、大庭景親の爲に石橋山に敗れた前後は、非常な大暴風雨で、三浦勢その他の來援が洪水等の爲に妨げられた程であつた。

こうした災厄は全國的に擴大し續發したので、近畿地方、殊に消費區域である大都市、京都の如きは

機に迫つて居る。而して指導精神たる過去の敎は上達せる如く斯る非常時局を救ふの大任に耐えない。此に我が立正大師日蓮聖人は奮然躍起して、『我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ等を誓ひし願やぶるべからず』と國難打開の大運動を起したのである。いでや立正大師が六十一年間の血涙に彩られたる立正安國の提唱に、佛敎正義と國體正義の精要を聞かん哉。

『情微管を傾けて聊か經文を披きたるに、世皆正に背き人悉く惡に歸す。故に善神國を捨て、相去り聖人所を辭して還らず、是を以て魔來り、災起り難起る。言はずんばあるべからず、恐れずんばあるべからず云々』立正大師は自然と人事の大厄難の根源は、世悉く正に背き惡に歸する處より來ると斷案を下されたのである。

然らば正とは何ぞや、惡とは如何。

先にも述べた如く正とは完全圓滿の大道たる法華經である。即ち最高善である。而して惡とはこの最高善に達せざる不完全、相對善を取りて最高善に反對するの態度である、最高完全に反對せば一切を不完全にして最後の解決を有せざる不徹底に俚はしめる。國體觀に於てこの最高位、完全位を知らざる時源平の主家に仕ふるを知つて、天皇に仕ふるを忘れしむる。

而して正は、全體的にして、中心を確立せるものである。局部の眞理を以て、全的眞理を捨閉してはならない。況んやその中心を逸したるをや。小善に執はれ、大善を失しては、終局を禰するに至るものである之を國家にして言へば内にしては國體の正義を誤り一切の謬亂此所に生じ、外には、外國に追従して我國の尊嚴を忘れ、破國の因となるに至る。所詮、正は、内容と形式とその力用を具有するが

故に一切を開顯統一して價值創造の生を營ましめる正しき精神に反せるものは、本末を誤り、卑屈、厭世、下剋上、驕慢、乃至遊戯自滅に墮するに至らしめるのである。

されば聖人一期の大事を開明せんが爲に撰述遊ばされた開目鈔には『夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三あり、所謂主、師、親これなり』と、歸依の中心を明示せられた。

佛教のみならず、國家にあつても、最も重大な事は、この中心を確立する事であらねばならぬ。此の中心を逸した處に悪平等あり、下剋上がある。聖人は『我國の王は天照太神の御魂の入りかはらせ給へる王なり』と仰せ遊ばされて、皇祖皇宗の神靈は今の御玉體に具はらせ給ふ事を力説し、以て時間と空間に亘つての國民歸依の中心を明示せられた。而して義は君臣にして、情は父子、常に皇室より

教の大本を垂れ給ふ、是即ち主師親の三徳を兼ね具へ給へる所以である。

斯く國家の中心が確認せられたならば、次に國民的自覺が促されなければならないのである。『我等は神州日本國民なり』との自覺に立たなければならぬ是こそ國民としての最も最初に持たざるべからざる處にしてその榮譽は寸時も忘れられてはならぬ。我が立正大師は『日蓮と同意ならば地涌の菩薩ならんか』と言つて、日蓮と歸依の中心を同じふし、その行動を共にせんとするものは、佛陀最高理想の實現者として選ばれたる選良であり、大道の實踐者なりと賞讃せられた。守護國界主經に『國界主を守護せば五の守護を爲す』と説かれてゐる。一、大臣を守護す、即ち爲政者が守られる。二、百姓を守護す、萬民の生活の保證が爲される。三、庫藏を守護す、國家の經濟が確立する。四、四兵を守護す、是國防軍備の充實であり、五、隣國を守護す、是世界の平

和に貢献するの謂である。

斯の如く、佛教は國民たるものは、協力同心國界主即ち國王を守護すべしと教令してゐるのである殊に日蓮聖人に至つて、國體の核心、天壤無窮の意義を光顯して名分の大本を確立し、不惜身命、知法思國の忠誠を盡すべき事を嚴令したのであつた。

就中『日蓮生を此の土に得たり、豈我國を思はざらんや』此の信念は等しく日本人の持たざるべからざる處にして、又之こそ世界に比類なき我が國民精神の精華であると言はなければならぬ。萬葉集に、

今日よりはかへりみはせじ天皇の
 卑夷のみたてと出でたつわれは
 と歌ひしが如き、又

海行かばみづくかばね
 山行かば草むすかばね
 大君のへにこそ死なめ
 かへりみはせじ

と詠じたる皆これ我等が祖先の有したる覺悟であつた。されば清水寺の桂月法師は

勅なれば身をばすてゝき武士の

やそうち川の瀬には立たねど

といつて、承久の亂に後鳥羽上皇の御爲に潔く殉じたのである。

此の身命を君に捧ぐるの覺悟を、正しき法の指導に依りて導く處に、眞の大忠の意義を存する。日蓮聖人は、平重盛の事を引用して「孝子父を捨て、王に參る、孝の至なり」と判じ、忠節を盡す處に皇道の本義ありと、忠孝一本の大道を明示遊ばされた。更に我國體の尊嚴なる所以を説いて「我國は神國なり乃至八萬の國にも勝れたる國ぞかし」と萬邦無比なる所以を高調したのであつた。殊に「小蒙古、大日本國に押寄するの條云々」と言つて、蒙古を以て小國なりと爲し、我國を以て大日本國と爲せるは

す。」噫。

聖人の知法思國の大忠に對し、報いられたるものは何ものであつたか。唯、刀杖瓦礫、惡口罵詈、流罪、死罪等の諸難がそれであつたのである。

『日蓮は日本六十餘州島二つの中に、五尺に足らぬ身一つ置く處なし』、何たる悲壯の聲ぞや。我等六百五十餘年前の當時を偲んで、涙潸然として下るを覺ゆる。而も聖人は、大難四ヶ度、小難風の前の塵の如くふりかゝる間に『日本國の一切衆生の異の苦しみを受くるは、日蓮一人の苦しみなり。』鳥と虫とは泣けども涙落ちず、日蓮は泣かねど涙ひまなし』と上下萬民の惱を一身に悲しまれたのであつた。

『夫れ國は法に依つて昌え、法は人に因つて貴し、國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法をば誰か信んずべきや、先づ國家を禱りて須く佛法を立つべし』
『若しこの國を毀壞せば復佛法の破滅も疑ひなきものなり』と。燃えるが如き愛國護法の至情は、法の

眞によく我建國の大精神を把握明示せるものと言はなければならぬ。領土は如何に廣くとも、建國の精神に價値なきものは、世界完成の上に大なる意義を存しない。

之に反しその國の存在が世界萬邦の儀表典型として萬國の仰ぐ處とならば、眞に偉大なる國家と言はなければならぬのである。

後年水戸光圀卿が、その封祿の半を捧げて、大日本史を編纂せられたのであるが、そは日蓮聖人の活精神に感孚せるものであつたと言はれて居る。
如上の精神を我が神州日本人の魂より骨抜きと爲した念佛宗乃至諸宗の誤に對し、我が日蓮聖人は、
『萬祈を修するとも驗なし、若かし此の教を禁ぜんに』と、權實二教の戦を起して、破邪顯正の師子吼を遊ばされたのであつた。『法を知り國を思ふの志尤も賞せらるべきの處、邪法邪教の輩、譏奏讒言するの間、久しく大忠を懷いて未だ微望を達せ

邪正を究明して、亡國の病根を除き、庶民無限の苦しみを拔濟し、天魔波旬を降伏して、祖國を泰山の安きに置かんとしたものである。
『日蓮は日本國の大難を拂ひ、國を持つべき日本國の柱なり』とは、如何に自ら任ずることの大なりしかを知るに足る。

汝早く信仰の寸心を改めて速に實乘の一善に歸せよ。然らば則ち三界は皆佛國なり。佛國其れ衰へんや、十方は悉く實土なり、實土何ぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壞なくんば身はこれ安全にして心は是れ禪定ならん、此の詞、此の言信すべし崇むべし。

仁王經、囑累品第八に言く。

『大王よ、破國の因縁は皆汝自ら作る。己が威力を恃み、四部の衆を制して修福を聽かず、諸の惡比丘あつて別清の法を受け、知識の比丘共に一心と爲り、互に相親善し、齋會して福を求む。是れ外道の法にして都て我が教に非ず。百姓疾疫し無量の苦難あり、當に知るべし、爾の時に國土破滅せん、大王よ、法末世の時、國王、大臣、四部の弟子、各非法

を作し、横まに佛教に與みし諸の過咎を作る、法に非ず、律に非ざるなり。

大王よ、我が滅度の後、四部の弟子、一切の國王、王子、百官、乃ち是れ三寶の護持に任ずる者、而も自ら破壊す、師子身中の蟲自ら師子の肉を食ふが如し、外道に非ずや、我が法を壞るものは大過咎を得ん、正法衰薄して民に正行無し、諸惡漸く増して其の壽日に減じ、復孝子無し、六親不和にして天龍祐けず惡鬼惡龍日に來つて侵害し、災怪相繼ぎて禍を爲すこと縦横なり、當に地獄、畜生、餓鬼に墮つべし、若し人と爲ることを得るも、貧窮下賤にして諸機具せず、影の形に隨ふが如く響の聲に應ずるが如く、人の夜、書するに火滅して字存するが如し、法を毀ぶる果報も亦復是の如し、惡比丘名利を求むるが爲に我が法に依らず、國王の前に於て自ら過患を説き破法の縁を作る、其の王別へすして此の語を信受し、横まに制法を立て、佛戒に依らず、當に知るべし、爾の時に法滅せんこと久しからず、大王よ、未來世の中に國王、大臣、四部の弟子、自ら破法破國の因縁を作り、身自ら之を受く、佛法の咎に非ざるなり」

豫告

小林一郎先生口述

法華經講話 第二輯

定價 金五拾錢
送料 金六錢

右者本月下旬出版之豫定に有之候
第一輯は忽ち賣切れ乍遺憾絶版に
付御諒察の上可相成早く御申込被
下度候

財團 法華 統 一 團

電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

法華經講話

(第十一)

文學士 小林 一 郎

妙法蓮華經序品第一 (承前)

これまでに序品の偈を一通り読んで参つたのであります。この偈にあらはれた所に依りますと、菩薩の行を積むといふことが、すなはち佛に成る道であるのでありますけれども、その菩薩の行といつてもいろいろの道があつて、各々自分に縁の有る所から入つて行くのが宜いといふことが、はつきり判る譯であります。人々その境遇、事情がいろいろ違ひますから、結局は同じ所に行くのでありませうけれども、自分の境遇、自分の事情に相當な所から修行して行くことが宜いのであります。忙しい商賣をして居る人が、毎日日本を讀んで居る譯にも行かないし

又本を讀む境遇の人が無暗に世の中で活動する譯にも行かないのであります。それ〴〵の境遇に應じた所から修行して行つて、結局は自分の骨折が世の一切の人の役に立つといふことを理想にして行く。さうすれば初めの歩いて行く道は違ひましても、歸着する所は同じ所に行く譯であります。さういふやうな意味がこの偈の中には能く説明してあるのであります。いろいろの方法から、斯ういふやうなやり方をしても宜い、又斯ういふやうなやり方をしても宜い。けれどもどの方法でも、佛様のお心持を自分の心持として修行して行けば、歸着する所は同じ所に行けるといふ事が説き明されてある譯であります。

所で、さういふ事を理論として説明をして居るとも一應は役に立つのでありますけれども、要するに信仰のことは實行でありますから、自分が實行しなければ、幾ら理窟がわかつたつて大した力にはならぬ譯です。それで日蓮聖人は「理」と「事」に分けていろ／＼な事を説明された。法華經に就いている信仰したり研究して見ても、要するに理と事の二つになる。法華經が一番勝れた經典であるからこれを信じなければならぬといふことは、支那の天台大師がはつきり言ひ始めて、續いて支那の唐の時代に妙樂大師といふ人が出て、日本に傳はつては傳教大師も出て、いろ／＼法華經に就ての説明もあり、又信仰した人も多けれども、要するに今までの理の方である。それで日蓮聖人御自身は、今からは理でなくして事の方に行かなければいけないと言はれて、自から事といふ方の道を開く爲に骨を折る。斯うマア宣言をされた譯であります。

らない時になると、悪い奴はどん／＼悪い事をするでせうけれども、考の有る人は、これでは堪らぬこんな事をやつて居つてどうなるかといふことを本當に思ひつめて、そこで初めて眞の信仰を求めるといふことになるのであります。

だから日蓮聖人は、今迄の時代はそんなに世の中が切迫しないから理論の研究が済んだのだけれどもこれからは世の中が非常に切迫して来て、たゞ理窟ばかり捏ねて居られない時になつたから、實行に移らなければならぬのだ。斯う考へられた。さうして「時の然らしむるのみ」と言はれて、時に依つて異ふ、決して自分が天台、傳教よりも勝れて居ると思ふ譯ではない。天台や傳教の時にはまだ／＼世の中がそれほどにならなかつたから、理論で終られたのだらう。それはそれで宜かつた。けれどもこれから後はなかく／＼さうはいかぬのだから、今度は一つ理窟ばかりを捏ねて居ないで、皆が自分の毎日の生活

理といふのはどういふ事かと言へば、それは別の言葉で言へば理論である。事といふのは今の言葉でいへば實行であります。理論も一通り大事だけれども、要するに實行が大事である。實際にやらなければ、自分も本當の意味の有る一生を送ることは出来ませぬし、又世の中を教ふ譯に行かないといふので理論は理論として天台大師以來、モウ殆ど遺憾の無だけに言つたから、これからは一つ實行しよう。斯ういふ事が日蓮聖人御自身の独自の立場であつた併ながら日蓮聖人は、理と事と分けて、自分は事をやると言はれたからといつて、それより前の天台傳教等の人々はずまらないものだといふことを言はれた譯ではない。これは時代に依つて違ふのであります。前にも申しましたけれども、本當に人間が一生懸命になるといふ時は苦しい時でなければならぬ。世の中が安樂であると、一生懸命といつても何處か強みがある。だん／＼世の中が苦しくなつて堪

の上に於て法華經の教を實現して行くやうに努めなければならぬ。これをやるのがこれから後の法華經を信する人の仕事である。斯う考へられて、この法華經の教理を實行する者を所謂法華經の行者と名けられた。自ら法華經の行者を以て任じ、又お弟子達や信者達も、皆法華經の行者になるやうにといふことを主として導かれた譯であります。

日蓮聖人の當時も既にさういふやうな切迫した激しい時代でありましたけれども、お互ひの生れ合せた今日の時代は、又一層激しい時代であります。所謂末法の世といふやうな、末の世の激しい相が、お互ひの生きて居る今の時代に於て一番強く現れて居るやうに思はれる。でありますから今日に生れ合せた私共は、この經典を十分研究すると共に、これをたゞ理論に止めずして、直にこれを自分の身に行ふといふ決心をする。これが最も大事な事であらうと思はれるのであります。今まで讀んで参りました偈

の中に、様々な修行の方法があります。その中に於て自分に適切などれかを選んで、さうして一つ自分の實行を勵むといふやうにして行つたら宜からうと思ひます。幾ら難かしい理窟を言ひましても、理窟だけでそれは所謂戲論に終る。自分が實行する見

込も無いのに、たゞ理窟ばかり列べて居るといふのは所謂戲論です。戲といふのは無責任といふ意味で無責任な議論を戲論と言ふ。私共學校で學生などを教へて居るのですが、うっかりすると戲論に終る。自分には出来ないけれどもお前達だけやれと言ふ。それは要するに戲論であつて、役に立ちはない。どんなに理論が發達しても、それが戲論ではならないのでありますから、必ず自分もこれを實行しよう、又この理窟が尤もだと思つたら實行して呉れといふ心持で、お互ひに勵まし合ふことが最も必要であらうと思ひます。

さういふ意味でこれから後の經文を読んで見ます

と、それ／＼自分達に適切な道が見出されるであらうと思ひます。

爾の時に文殊師利、彌勒菩薩摩訶薩及び諸の居士に語らく。

(爾時文殊師利諸彌勒菩薩摩訶薩及諸居士)

以上の所で彌勒菩薩が文殊菩薩に向つて質問をした譯でありますから、そこで文殊師利が彌勒の質問を聽いてこれに對して返事をする。文殊師利が彌勒菩薩その他のいろ／＼な居士——居士はやはり菩薩のことであり、その人々に對して言ふには

善男子等、我が惟付するが如き、今佛世尊大法を説き、大法の雨を雨し、大法の螺を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べんと欲すならん。

(善男子等。如我惟付。今佛世尊。欲説大法。雨。大法雨。吹大法螺。擊大法鼓。演大法義と)

いま自分の推量することが若し間違がないとするならば、これから佛様は、大法といふ一番勝れた教

をお説きになるのであらう。さうして『大法の雨を降し』雨をふらすといふことは、平等の意味であります。それは、雨といふものは何處にも同じやうに降ります。人間はいろ／＼選り好みをする、彼の家は大きい家だ、此の家は小さい家だなど、言ふけれども、雨は大きい家だけ降るのでもなければ、小さい家だけ降るのでもない、同じに降る。また人間は、あの花は綺麗だ、こつちの花は汚ないなど、言つて、いろ／＼選り好みをしますけれども、雨はそんなことはない、雨は綺麗な花でもまた汚ない花でも同じに降る。だから雨を降らせるといふことは平等の意味であります。吾々は善人とか悪人とか、智慧の有る者とか馬鹿な者とか、いろ／＼な區別をしますけれども、佛様が教をお與へになる時には、善人をも相手にされ、悪人をも相手にされる、智慧の有る者も無い者も相手にされる、金の有る者も無い者も、地位の高い者も低い者も、苟くも人間である

以上は皆教へてやらう。斯ういふ心持で吾々に教を説かれる。それは丁度雨が降つて總てを潤すやうなものである。そこで大法の雨をふらすと言はれる。教を説き弘める方の人間になると、なか／＼さう行かないで、相手が相當な人だと思ふと叮嚀に話をし相手がつまらない者だといふと、いゝ加減に突放すといふことをやりましますけれども、それは佛の本當の精神ではないのであつて、佛様はあらゆる人を相手にして、あらゆる人に皆尊い教を與へよう、斯ういふ心持を常に失はれない。だから雨を降らせるやうに教をみな平等に説かれるのであります。

それから『大法の螺を吹き』螺といふのは所謂法螺の貝のことです。日本でもよく山伏などが吹いて居りますが、あの法螺の貝の音といふものは、傍で聞いて居るとそんなに大きい音がしないけれども、遠くで聞くとよく響くものです。私共も若い時分に吹いて見たことがあります、傍で聞くとそんなに大

した音ではない、ところが一町距て、二丁距て、向ふの方で聞くと、あの低いやうな音がなか／＼能く聞えるのであります。これは何に譬へたかといふと佛の教がいつ迄経つても力を失はない、その時は大した事がないやうに思つても、だん／＼遠くなるほど、價值がわかつて来る、だん／＼遠くなるほどその力が大きくなつて行くといふことに譬へたのです。これは教そのもの、價值を測るメートルのやうなものであります。その時聽いて大變面白と思ふ事も、後になつて見るとつまらない事もある。その時はそんなに面白と思はなくても、久しく経つてから成程と思ふやうな事もある。それが教の價值でありませう。お釋迦様の教とお釋迦様の從弟である提婆達多の教と比べると、提婆達多の方がいつでも珍しい事を言つて居つた。お釋迦様の仰しやる事はさう變つたことはない。提婆達多の言ふ事は實に珍しい事で、皆が吃驚するやうな事ばかりだつた。だから

三八
ら提婆がお釋迦様に對立して教を説き始めた時にはお釋迦様のお弟子がズン／＼と提婆の方へ行つてしまつた。けれども暫く経つて見ると、やはりお釋迦様の方がなんだか懐しい、提婆の言ふ事は成程珍しい面白い事だけれども、懐しみが少ない。お釋迦様のお話はその時は平凡なやうだけれども、後で考へて見ると、なんだか有難くて懐しいと言つて、暫く経つと、又提婆の方へ行つたお弟子達がお釋迦様の方へ戻つて来たといふ話があります。實際本當の教といふものはさういふもので、その時は珍しくなくても後になつて想ひ出す毎に價值がある。斯ういふのが本當でありませう。それを法螺の貝に譬へた。法螺の貝の聲は、傍では大きい聲はしないけれども遠くなるほど大きい聲に聞えると同じやうに、佛の教といふものは、後になればなるほど尊く感ぜられて、總ての人の歸依する所となる。これに譬へたのであります。

それから「大法の鼓を撃ち」とあります、大法の鼓を撃つといふことは、教を弘めることを、鼓を撃つてその響きが遠くに傳はることに譬へるのであります。まずけれども、教を弘めるに就ては、善い事を勧めると共に、悪い事を抑へて行かなければならぬ、人間は佛様のやうな尊い心持も有つて居るけれども、又凡夫であつて随分心に迷ひが多いのであります。それから、その悪い方を抑へるといふことも非常に必要である、慈悲といふのは本當はそれでせう。總ての人にたゞ優しくするといふことが本當の慈悲ではない。善いものはこれを勧め、悪いものは抑へて行つてその害悪を止めるといふことが本當の慈悲でなければならぬ。だから鼓を撃つと言ひましても、その鼓といふものは二種ある。一つの鼓は、その鼓の音を聴くと總ての者が奮起つやうな鼓の音、もう一つの鼓は、その音を聴くと總ての悪い奴が思はず慄え上るやうな激しい音のする鼓、この二種ある。これは

三九
「鼓」と書いてありますが、皆太鼓です。支那でもさうです。日本では太鼓といふものが別に出たものですから「鼓」の字を書くこと、お能やなにかに使ふボン／＼といふ鼓のやうに思ふけれども、一體鼓といふのは太鼓の事です。その太鼓に二種ある。一つは總ての善い者が奮起つやうな聲を出す鼓、これを「天鼓」と言ふ。一つはその音を聴くと總ての悪い者が心を痛めて思はず慄え上つて恐れるやうな音のする鼓、それを「毒鼓」と言ふ。これを合せて「双鼓」二つの鼓と申しますが、これは教としては兩方大事なのです。善い者に勵みを附ける教も大事でありませう、悪い者を慄え上らせて再び悪い事が出来ないやうな心持を起させることも大事であります。それは共に慈悲の心持から出る。悪い者を許して置くといふことは本當の慈悲ではない。悪い者にはその悪い事を自覺させて、直にその行ひを改めさせるといふことにも力を用ひなければならぬ譯であります。

す。佛様はいつでもさういふ風に、善い者を善い道に勧めると共に、悪い者を反省させて、その間違ひを一日も早く直させるといふやうに努めて居らつしやる。これが所謂「大法の鼓を撃つ」といふことでありませう。

さうして「大法の義を演べ」人間として行ふべき道のその詳しい意味を説明される。さういふ事が佛様の一代のお仕事であるが、今これからさういふ事をなさるのであらう「大法」といふのは、佛様の心に信じて居らつしやる事をその儘打ち明けられた、所謂眞實の教が大法であります。眞實の教をこれからお述べになつて、さうして世の中の人間の迷ひを覺醒し、永遠に衆生が本當に意義の有る生活に入るやうにといふお心持であるだらう。

斯う文殊が自分の解釋した意味を一通り述べまして、それから更に進んで、これは今のお釋迦様だけではないのである。苟も佛である以上は、皆斯うい

に斯の瑞を現じたまふならん。

(是故當知。今佛現光。亦復如是。欲令衆生咸得聞知一切世間難信之法。故現斯瑞也。)

今は佛すなほお釋迦様が身から光を發せられたのも、それと同じことであるだらう。

「難信の法」といふのは、難といふことは深いといふことです。いつでも本當のものは難しい、何だつて易しいものに確なものはありません。これは佛の信仰をする上に於ては、先づ以て考へなければならぬ事です。骨を折らずに善いものは出来はしません。品物を拵へたつて、鼻唄を歌ひながら拵へて良い物が出るものではない。良いものは難しい、易しいものは確なものではない。これは何でもさうでせう。品物を拵へたつて、字を書いたつて、繪を描いたつて、骨を折らずに良いもの、出来る例は無い。だから本當に良いものが欲しければ、骨の折れることは覺悟しなければならぬ。骨の折れるのが嫌

ふやうな教へ方をなさるのが定まつた道であるといふことを續いて述べられる。

諸の善男子よ、我、過去の諸佛に於て曾て此の瑞を見たてまつりしに、斯の光を放ち已りて即ち大法を説きたまひき。

(諸善男子。我於過去諸佛。曾見此瑞。故斯光已即說大法也。)

前の世のいろ／＼な佛様の所で自分は教を聞いた事もあるが、その過去の諸佛に於て、曾つて此の瑞——こんな美しい光が佛様の身から出たことを見た事もある。ところが過去の佛様でも、斯ういふ光が身から出て、それから後には、いつでも大法といつて最も勝れた法をお説きになつた。これはすべての佛様に通じた道である。

是の故に當に知るべし、今の佛の光を現じたまふも亦復た是の如く、衆生をして咸く一切世間難信の法を聞知することを得しめんと欲すが故

やならば良いものは得られないと覺悟しなければならぬ。咸く骨を折らずに成べくうまい事をしようといふ、そんな事が出来るものではない。これは並び立たぬことです。だから難しいといふことは深い事でありませう。これは商賣をしても、教育をしても、役所に勤めても、本當に良い事をしようと思つたら骨の折れることは覺悟しなければならぬ。骨を惜んで居つて良い事の出来るものではない。だから難しいと言はれることは、それは深いことだといふことであります。その意味に於て、傳教大師が言はれた言葉が非常に尊いと思ひます。

「淺きは易く深きは難しとは、釋迦の所判なり。淺きを去つて深きに就くは丈夫の心なり」

(淺易深難釋迦所判。去淺就深丈夫之心也。)

この言葉は吾々が能く心に銘じなければならぬ。淺きは易く深きは難しとはお釋迦様が言つて居らつしやる。淺い表面の事だけやるならば骨は折れはしな

い。深い根柢までやらうとすると難しい、これはお釋迦様の判定された事だから間違ひのない事だ。善いものを得ようとするれば骨が折れる。けれどもお互ひにどうだらう。骨の折れる事は嫌やだと言つて、善いものをやらないうで表面だけで済まして置いてはつまらないではないか。だから浅きを去つて深きに就く、骨は折れても表面のものを止めて、深い本當のものに就くといふことが、それが人間たる者の本當の心掛けでなければならぬ、といふことを言つて居られるのであります。吾々大乘の佛教を學ぶ者はその心持を有たなければならぬ。どうせ人生といふものはさう樂なものではないのだから、出来るだけ難しい事を覺悟して、さうして本當の價値の有る事をやらうといふ覺悟を有つこととあります。

所が、その本當の教は難しいぞと言はれる。「一切世間難信の法」世の中の人間が容易に信することの出来ないやうな、そんなに奥深く、そんなに難しい

併ながらそれが佛様の本心を打ち明けられた教である。この教をこれからお説きにならうと思つて、衆生の注意を促す爲に「斯の瑞を現す」といつて、身から光が出るやうなこんな不思議な事をお示しになつたのであらう。

諸の善男子よ、過去無量無邊不可思議阿僧祇劫の如き、爾の時に佛有す。日月燈明如來、應供正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊と號く。

(諸善男子。如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫。爾時。有佛。號日月燈明如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。)

昔のことを考へると、吾々が考へても考へ盡せないやうな遠い昔、阿僧祇は限り無しといふこと、限り無く遠い昔の時代に佛様が世に出られた、それを日月燈明佛といふ。日月どか燈明どかいふのは、これは明るいものを言ふ、即ち佛の智慧に依つて一

切の人の心を照す、一切の人の心の闇を除いて行くといふ力用を言葉に表はして日月燈明と言ふ。それからその下に、

如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊。

と列べてあります。これが佛様の十號と言つて、佛様の具へて居らつしやる徳を稱へる爲の十の言葉であります。これは佛様といふ完全無缺な方の具へて居らつしやる性質を、世間の人から仰ぎ見て附けた名前です。佛の具へて居らつしやる力が十だけに限るといふことはありはしない。十であつても、二十であつても、百であつても、千であつても、佛は無量無邊の力を具へて居らつしやつて、その場合々々に應じてその力をお現しになるのだから、十とか二十とかいふ數字で限られる筈はない。けれどもさう無量とか無邊とか言つたところが、吾々にはそれはわからなから、そこでその澤山のお徳を大體十

に取纏めてこれをお讃め申す。それが所謂十號であります。だからこの十の中に、百も千も萬も含まれて居るのだといふ風に考へて讀む方が宜しい。

所でその十號の第一の「如來」といふことは、不來不來といふことだと言はれて居ります。「如」といふ字は「いつも」といふ字で、いつでも來て居るといふのが如來であります。普通の人間は「今日は」と言つてやつて來る。「さやうなら」と言つて歸つてしまふ。それから暫く經つて又やつて來るといふやうに、時々來る。併し佛様はいつでも來て居る。いつでも來て居るといふのはどういふ事かといふと、吾々が眞面目になつて佛様の事を考へて見れば佛様はいつでも吾々の心の中に現れて來て下さる。吾々の心が間違つて居るから佛様と遠ざかつて居るのだけれども、吾々が本當に眞面目になつて考へて來ると、佛の力がいつでも吾々の心に及んで來る、佛はいつでも吾々の心に現れて來て下さるのであり

ます。であるから如來と言ふ。いつでも来る方である。これが一番大事な點です。吾々が心が淋しいのは自分の力が足りないからなので、本當に一生懸命に考へれば、考へた時に佛の力が吾々の心に加はつて吾々の心はいつでも明るく朗かになつて来るのであります。であるからその意味に於て佛はいつでも来て居らつしやるものである。いつでも来て居らつしやるから不去不來、去りもしなければ來もしない。いつでも吾々の心に力が及んで居る、それを氣が附くか附かないかは、それは銘々の考一つであります。銘々の心が間違つて居れば、佛様はまるで縁が無いやうに思ふし、銘々の心持が正しくなつて來れば、佛に縁の有るものになりますのであります。佛そのものゝお力はいつでも吾々の心に加はつて居る譯であります。それを如來と申します。

第二に「應供」といふのは、所謂供養に應ずるといふ意味で、本當に供養すべき方といふことであり

らつしやるでせうが、どうです、後で振返つて見て人の爲だと思つて居た中に、僅かばかりでも自分の爲といふ心持が混ざつて居はしなかつたか。そこを考へて見なければならぬ。私共はいつでも後で恥かしく思ふ。冬になつたら子供に冬帽子を一つ買つてやる。子供に買つてやるのだから、子供の喜ぶやうなものを買つてやれば宜いのですが、どうも買つてやる時には親父の好みが入つて来る、親父が見てこれは宜さうだと思ふものを買つて来る。子供が嫌やな顔をする。「これが宜いんだ」と言つて押付けてしまふ。本當の慈悲ならば、自分の爲でなくして、與へられる向ふの人の爲であるべきでせう。けれども帽子一つ買つてやるのでも、買ふ者が自分といふ考をその中に入れてやるのであります。だから人の爲と言つても、人の爲といふ中に自分の爲といふことが少しは入つて居る。この頃滿洲に行つて居る兵隊に品物を贈らうといふ、これは善

四四
ます、供養といふのは、花を捧げるとか、それからお燈明を點けるとか、食物を供へるとかいふことを普通供養と申しますけれども、さういふのはたゞ形の上の供養でありまして、供養といふことの本當の精神は感謝の心持です。感謝の心持が形に現れたものが供養です。有難いと思はないで物を供へたつて仕様がなない。「今日は近くなつた人の三十三回忌だから、面倒臭いけれども團子でも供へて置け……」といふのでは何にもなるものではない。供養といふものは感謝の心持の現れである。所が感謝されるだけの價値の有る人が世の中にどれほどあるかといふと、佛様以外には本當に感謝される價値の有るものは無い。それは少し言ひ過ぎるやうだけれども、お互に考へて見ると、一體私共が人の爲に善い事をしてやる時に、全く自分を捨て、向ふの事だけを考へて居たかどうか。これは後で反省して見なければいかぬ。あなた方でも、人の爲に相當骨を折つて居

い心掛です。併しその滿洲の兵隊に贈る品物を陸軍省に持つて行つて「これをどうぞ滿洲に送つて下さい」と言つた時に、「さうですか」と言つて引たくられてしまふと、快い氣持はしない、「折角持つて來たのになんだ……」といふ氣になる、所が副官が何か出て來て「洵に御好意感謝の至りです。滿洲に居る者も喜びませう」と言はれると喜んで歸つて來る。滿洲の軍人の爲を考へて居るやうだが、やはり自分の爲を考へて居るので、禮を言はれた方が氣持がよい。人の爲と思つて居ますが、人の爲といふ中に、自分の爲が大分入つて居る。電車の内で老人に席を譲つて「お婆さん、此處へお掛けなさい」と言つても、お婆さんがたゞ「ハイ」と掛けるの「有難うございます」と言つて掛けるのでは氣持が違ふ。禮を言はれないと「ナンダ、この婆ア、禮も言はない、立つのぢやなかつた……」といふやうな心持が起きて來る。人の爲に善い事をするのは結構

ですが、人の爲に善い事をしながら、やはり自分を認めさせたいといふ心持が、それは人に依つて多いか少いかあるけれども、多少混つて居る。これが凡夫の習ひであります。

それでは人に感謝せらるべき價値は無いのです。本當を言へば、善い事をして自分で威張つて居るのは、向ふから感謝される價値は無い譯です。所が佛様は、眞に大慈悲を以て一切の人に臨んで、一切の人を憐れむといふ心持の外何も無い。佛様はどれ程の人に讃められてもちつとも嬉しくない、どれ程の人に讃られてもちつとも悲しくない。たゞ一切の人を救はうといふ心持を以て接して居らつしやる。さうなつて初めて所謂應供、感謝せらるべき價値の有る者になる。斯ういふので應供と申します。佛こそは供養せらるべきものである。言ひ換へれば一切の人から感謝せらるべきものである。佛の境界に行かない者は、人の爲に善い事をして居ると思ひなが

ら、自分の爲といふ考が混るから、それは本當に感謝する價値は無いといふやうに、吾々共が自分を反省して見る方が宜い。

第三に「正偏知」といふことは正しく偏く知るといふことであります。先づ人間の知識といふものは極く一小部分に限られて居つたのでは完全なものではありませんぬから、總ての事に行渡つて知るといふことが必要でせう。即ち「偏」といふことが必要です。けれども何もかも知つて居るだけでは本當の知識とは言へないので、そのあらゆる知識が統一を有たなければならぬ。あの事もこの事も知つて居るけれども、結局何も知らないといふ人が多い。それは纏まらないからである。少しばかりいろいろな事を知つても、結局、いろいろな事を知つて居るのは何の爲かといふ、目的がハッキリ立つて居なければ、いろいろな事を知つて居たつて、知つて居るのはつまらないことになる。だから「正」といふことがな

ければならぬ。正しいといふことはその中心を有つて居る事です。様々な知識の中心がなければいけない。何の爲といふことを確かり捉へて、それからいろいろな方面に出来るだけ廣く、出来るだけ總てを漏さないやうに知ることが必要でせう。だから正しく、偏く、この二つの條件が要る。正しくといふのは統一を有つて居ること、偏くといふのは限られないで總てに及ぶこと、その二つの條件が備はらなければ、物を知るといふことが本當に知つたにならぬ。この頃は偏の方はなかくやつて居る。少し悪口を言ふやうだけれども、小學校の時から大學を卒業するまで、いろいろな事を知る、けれどもいろいろな事を知るばかりで、正の方はありはしない。「あれも知つて居る、これも知つて居る」けれども「何の役に立つか」、「なんだか無茶苦茶にいろいろな事を知つて居る……」それではいかぬ。その偏く總てに及ぶ知識が、正しく統一をもつて纏つて居る

といふことが必要である。佛様であればさういふ事が本當に出来る。吾々も佛様を手本として、成るべくその方に努めて行かなければならぬ。この正と偏といふ二つの意味を一つの言葉に纏めたのが「妙」といふ字です。妙法蓮華經とか、觀音様の妙智力とか言つて、妙の字を頻りに使ひます。妙といふのはどういふ意味かといふと「なんだか知らんけれども妙な事だ……」「妙といふのは言葉で言へないからそれが妙だ……」などいふ、加減にやつて居りますが、さうではない。妙といふことは別けて言へば正、偏といふことです。正しくして總てに偏く居る、だからそれを妙と言ふ。佛の智慧は總てを超越して居る、あらゆるものを超越した最も尊い知識といふことが所謂妙智であります。その妙といふことは別けて言へば、正しく纏りを持つて、さうして偏く總てに及ぶ、斯うなつて行く。それが正偏知であります。

知識のことで、知識と實行とが揃つて行くことを明行尼と言ふ。知識と實行とがいつでも揃はなければいけない。知つただけで行はないのはつまらない。併し又行つただけでその意味を知らないのも困る。これは両方あります。私共のやうに理窟を言ふことを職業として居る者はいつまでも知る方が先に立つて、行ひがこれに伴はない。「腹を立てゝはいかぬナ」といふことは知つて居ながら、自分が腹を立てゝ見たり、「怒を恣にしてはいかぬ」と言ひながら自分が時々食ひ過ぎたり……、マア私共はどつちかと言へば知る方が先になつて行ひの方がこれに伴はないので、いつでも恥かしく思つて居ります。ところがこれと反對な人もある。行ふ事は相當に善いけれども、その行ふことの意味がわからぬで、習慣でやつて居るといふやうな人もある。それも實は困る何故かといふと、自分が習慣的に善い事をして居る

ので、その意味がわからない。だから異つた境遇へ行つて異つた刺戟を受けると、今まで折角善い事をして居つたのが皆駄目になつてしまふ。ですから知らないで行つて居るといふことは決して完全なものではありませぬ。よく田舎などに居る人で、別に嘘を吐く習慣の附かない人は正直である、あの人は正直で向に結構だといふのですが、それは正直にすることが大事だといふことを知らないで、たゞ習慣的に正直にして居る。さういふ人が東京などに出て來ると、一月ぐらゐの間にスツカリ墮落してしまふ。「正直にして居つては世の中は渡れないのだ、これから一ついゝ加減にやれ」といふことで直に墮落してしまふ人があります。ですから善い行ひをして居たら宜いといふものでなくして、その行ひをするといふことに就ては、その理窟がわかつて自ら確信して行ふのでなければ、その善い行ひといふものは決して永續するものではないのです。

皆様の中にもヒョツとしたら斯ういふやうな問題を持つて居らつしやる方があるかも知れませぬ、家庭で親が信心して居る、さうすると子供も親の眞似をして、七つ八つの譯のわからない時から親の後ろに坐つて、親が佛壇に向つて掌を合せて居れば一緒に掌を合せる。親が「南無妙法蓮華經」と言つて居れば一緒に「南無妙法蓮華經」と言つて居る。親が「南無阿彌陀佛」と言へば一緒に「南無阿彌陀佛」と言ふ。さういふのは子供の時から教へ込まれて居るから、何といふことなしに、朝起きて佛様に掌を合せなければ気が濟まないといふやうになつて居るさういふ人がある。所が年頃になるとバツツと止めてしまふ。親父は吃驚してしまつて、「どうも小さい時は大層信心があつたが、この頃年頃になつたら止めてしまつた、どうしたものだらうか」と言つて心配する。能く世間にさういふ類の事がある。私共もよく相談を受けるのです。所がそれは行の方があつ

て明(智)の方が足らなかつた。何故禮拜をするのだか、何故題目を唱へるのであるか、何故念佛を唱へるのかといふことを知らないで、たゞ親父がやつて居つたから眞似をして居つたに過ぎない。心の土臺に根柢が無い。だから年頃になつて「佛様にお辭儀をしたつてつまらないぢやないか」といふやうな料簡が起ると、バツツと止めてしまふ。それは仕様がないので、大抵の人が一度はさういふ所を通るのである。あなた方のお子さんの中にもさういふ事があるかも知れませぬ。親が折角信心々々と言つても息子はちつとも相手にならぬ。子供の時は一緒に佛壇に向つて掌を合せたけれどもこの頃になつてやらないといふやうな事があるかも知れない。それは決して失望すべきものではない。今まではたゞ行ひの方だけをやつて居つたので、理窟がわからなかつた。だからそれに疑ひを懐くやうになつて一時は離れる。けれども又だん／＼年月が経つて、人生のいろ／＼

な苦勞などをして「これではならぬナ」といふことになつて、今度心の底から求めることになる、その時は本當の信仰になる。だからそれはガツカリすべきものではない。結局は知識の方と實行の方を伴つて行けば申分がないのであるけれども、場合に依ると知る方だけ知つて行はないといふものもあるし、習慣的に行つて居るけれども、その理窟がわからぬ者もある。さういふのは一度頓挫して、一度惱みの中を通つて、それから本當のものになる譯でせう。佛様は明行足でありまして、知る方に於ても申分がなく、又行ふ上に於ても少しも缺點の無い、明と行、智慧と實行とが揃つて居る方である。私共は自分で振返つて見ると、知る方が先へ行き過ぎて居る所もあるし、又行ひの方が行き過ぎて居つて智慧の足らない所もある。そこは自分で反省して見て、その足らない所を補ふやうに、それを完全にするやうに努めることが必要であります。大體に於ては若

い人は知る方が先に行つて、行ふ方が伴はないのが常であります。又年寄の方は實行して居て、その實行に就ての知識或は説明の足りないといふことも随分ありますから、お互にそれを考へて見て完全にするやうにした方が宜しいのであります。

第五は「善逝」といふこと、これは難かしい事であつて、善といふのは完全にといふ意味、逝といふのは世の中に執はれないといふこと、即ち世間に執はれずといふことが善逝である。世間に執はれてはいけない。言換へれば境遇に支配されてはいけない。人間といふものは境遇を自分で作らなければならぬものである。境遇に支配されてはいけない。人が尊敬するからといつて自惚れてはいけない。人が悪く言つたからといつてガツカリしてはいけない。得意の時でも有頂天になつてはいけない、失意の時でも失望してはいけない。要するに逝といふ字は執はれないといふ字であつて、世間の變化、世間のい

ろ／＼な事情に執はれるといふ心持を捨てなければいけない。それが逝といふことで離れるといふ意味です。別な言葉で言へば解脱といふことです。世の中に立つて健全な道を歩かうと思へばこれがどうしても必要です。世の中といふものはいつどう變るかわからない。だから少しぐらゐん都合が良いからと言つて自惚れたり、少しばかり悪い事があるといつてガツカリするといふことでは、逆も一生涯健全に送ることは出来ないから、所謂解脱する。周囲の境遇事情に執はれないといふことが非常に必要である。とかく弱い者はどつちにも弱いので、例へばお濠の側に生えて居る大きな松の木は、夏の百度の炎天でも萎れませぬ。冬、雪や霜が積んでも何ともない所が小さな草花は、チョット強い陽があたると萎れてしまふ、チョット冷たい風が吹くと枯れてしまふだから暑さに耐へられないものは寒さに耐へられない。暑さに耐へられるものは寒さに耐へられる。人

間もその通りで、貧乏したらガツカリして首を縊つてしまふやうな人は、金持になればキツト贅澤をして我儘をする人にきまつて居る。免職されたからといつてガツカリする人は、役が上れば直に有頂天になつて酔ばらふにきまつて居る。境遇に負ける人はどつちの境遇にも負ける失意の境遇に耐へられない人は、得意になれば腐つてしまふ。両方に強くなければいけない。暑さに強いものは寒さに強いのだから、逆境に耐へられる人であつて初めて順境になつても心が驕らないやうになれる。それが所謂解脱といふことである。解脱といふと難かしい事のやうに思ひますけれども要するにそれです。その修行をしなればいけない。周囲の人が皆讚めても自惚れてはいかぬ。周囲の者が皆敵になつてもガツカリしてはいけない。それが所謂解脱であります。それを「逝」と言ふ。吾々もこんな事を口では言つて居るけれども、なか／＼十分に實行が出来ませ

ぬ。それを完全に世間に執はれないやうな心持になつて行くことを「善逝」と言ふ。これが佛様のお徳の一つであります。佛様は周囲の人が讃めても何とも思はない。周囲の人が皆背いても何とも思はない。完全に周囲の境遇に執はれないやうな心持になつて居らつしやる。これが又吾々のお手本として學ばなければならぬ點であります。要するに自分の心一つが根本であります。その心一つを持ちあつかふやうでは、どんな境遇に居たつて幸福になれる譯がない。そこでこの「善逝」といふことが佛様のお徳の一つとなつて居ります。

第六に「世間解」世間といふのは種々様々な人の境遇といふ意味です。普通に俗語で言ふ世間といふのとは意味が違ひます。その様な人の境遇を一々理解してやること、それが世間解です。これはなかなか難しいことで、みな自分流に人の事を推測する人間の経験は限りがありますから、自分の限り有る

には停留場に來ても何も言はない者がある。どうも怪しからぬ、と思つて大に憤慨したものです。それから電氣局の或る人に會つた時に、私は早速その事を出した。「どうも車掌が甚だ不親切でいけない停留場で大きい聲で言へば宜いのに、小さい聲を出して言ふ、中には言はない者がある。あんな事では仕様がな、君達から一つ訓示を與へて、いつでも停留場で大きい聲で言ふやうにして呉れないか」と私は一生懸命になつて言つた。所がその電氣局の男が言ふには、「それだから、君達は困る。そんな無理な事があるものか」と言ふ。「何故無理だ」「何故」といつて考へて見給へ、あの車掌や運轉手は一日に十時間も勤めるのです。さうして東京の街は君も知つて居るやうに風がヒュー／＼吹いて埃が立つて、なか／＼容易な所でない。その風の強い埃の立つ中で停留場毎に大きな聲で怒鳴つて居れば、四、五時間経てば咽喉が腫れて聲が出なくなつてしまふ。だか

経験を本にして、他の人の事を批評したり、他の人の事を非難したりして居るのが現在の状態でありますけれども、境遇が違ふと利害得失が皆違ふ。右から見たのと左から見たのでは物事は違つて見える。それでですから自分の狭い経験を本にして一切の他人を批評しようといふことは無理です。世間解といふのは、種々様々な人の境遇が違ふのだから、その違ふものに對して一々これを察してやつて、無理に違つた立場から批判したり、非難したりすることのないやうにといふことが所謂「世間解」であります。どうも私共はさういふ事が出来にくい。餘程前の事でありませんが、私は東京市の電車に乗つて見るとどうも車掌が皆懶け者に見える。停留場に行つて大きな聲を出して、乗つて居る人に皆聽えるやうに「江戸川」とか「小川町」とか「飯田橋」とか言つて呉れ、ば宜いけれども、とかく大きい聲を出して言ふ者は少いし、小さい聲でコソ／＼言つたり、中

ら初めは大きい聲でやるけれども、長い間やる中にだん／＼聲の儉約をすることを覺えて、小さい聲で言ふやうになる。これは據るない事です。それを君達が非難するのは同情が無いといふものだ。若し車掌の聲が聽えないのが不自由だといふならば、君達がお客さんが小さい聲で話をして居たら宜いぢやないか、自分達は勝手に大きな聲で話をして置きなから車掌の聲が聽えないといふのは、あまり我儘ぢやないか」と言はれて私は一言もなかつた。「成程さうだ、こつちは勝手に大きな聲で喋つて居る。さうして車掌の聲が聽えないといつて文句を言ふといふのは濟まない事だ」と、スツカリ閉口して、謝つて歸つたことがあります。斯ういふやうに吾々は乗る人の立場から小言を言ふのだけれども、又車掌運轉手はその立場から別な考があるでせう。境遇が違へば皆違ふ。自分の境遇だけで他の人を無暗に批判するといふことは間違つて居ることである。それが「世

間解」です。人の境遇事情が種々違ふ、その違ふことを能く諒解してそれ／＼の同情を持つてやる。これだけでなければ世の中を導く譯に行かない。こんな事を口では言つて居りますけれども、私共もいつでも間違ひを致します、けれども、マア理想としてはさうあるべきでせう。

第七は「無上士」これは此の上も無い人だといふのだから別に説明を要しない。佛様の上に立つ人はありませぬから、この上も無い人といふのであります。

第八に「調御丈夫」調御——調へ御するといふのは、象だの馬だのを馴らすことです。印度の昔に於ては象や馬などを使つたものであります。乗るにも象に乗ることもあり、馬に乗ることもある。それから車を執かしたり、荷物を負はしたりするにも象と馬を使つたものです。今でも、私は極く短い間しか旅行しませぬけれども、印度のベレナスなどへ行つ

いふと、天といふのは印度の昔から信ぜられて居つた事でありまして、人間の世界以外に天上界といふ別な世界がある。その天上界の世界といふものは無憂といつて憂の無い世界、心配の無い世界である。天上界に生れればモウ心配が無い、少しも苦しい事辛い事は無い。嫌やな事は一つも無い。それから人間界といふものは有憂といつて憂の有る世界、いろいろ心配の有る世界である。そこで佛敎の起る前の婆羅門時代に於ては、この世に於て善い事をして居ると、次の世に於ては必ず天上界に生れる。その天上界に生れるといふことを己れの理想として、いろいろ行ひを勵むといふことをやつたものです。ところが釈迦様が出て敎を説かれることになつて、その考が根柢から間違つて居るといふことを明かにされた。即ち吾々は忙しいから暇になりたいと思ふのだけれども、暇になつて何も用が無かつたらつまらなくて仕様がな。人間に苦勞が多いから、苦勞が

て見ると、象に荷物を背負して居ります。銀座通みたやうな大きな通りを、象が背中に一パイ荷物を背負つてノソリ／＼歩いて行きます。チヨット他では見られないなかく面白風景です。印度では昔から馬と象を使つて居ります。その馬と象は初めは野生のものでありますけれども、それを御者が訓練して人間の言ふなりに動くやうになる。これを調御と申します。それを人を敎へるのに譬へた。佛様はどんな悪人でも、どんな馬鹿な者でもこれを敎へ導いて、結局は道を重んじ、敎を守るやうにして行かれる。ちようど野生の象や馬を上手な御者が訓練して行くと同じ事であります。であるから「調御丈夫」と言ふ。丈夫といふのは確にといふことで、敎へることが確かである。決して間違ひがない。どんな人間でも佛様が長く敎へて居らつしやれば、キツト佛の敎に歸依するやうになるといふ意味であります。

第九に「天人師」これはどういふ意味であるかと無くなれば宜いと思ふけれども、苦勞もなにも無くてたゞ生きて居るだけだつたら、退屈してしまつてなんだか嫌やになつてしまふ。それだから憂の無いといふ世界を理想としてはいけない。苦勞が多いから苦勞の無い世界を理想とするけれども、苦勞もなかつたら、なんだか知らんがたゞ生きて居ることになつたら、それはつまらないに相違ない。斯ういふ事を敎へられた。それ故に苦勞の多い人間も、苦勞の無い天上界の者も、共に完全なものではない。人間何が満足かといふと自分の生きて居る間に於て自分の骨折が、自分一人でなく多勢の人の爲になるといふことがわかつた時、それが本當の満足である自分の一生といふものは限りがある。自分の體の大きさも限りがある。その限り有る一生に於て爲した事が、限り無き多勢の人の役に立つといふことがわかつたら、その時本當の満足がある。だから天上界

の者も人間界の者も、共に教を受け、共に道を學ばなければならぬ、斯ういふのがお釋迦様の立場でありませう。昔は天上界の者を羨んだけれども、お釋迦様の教では天上界は羨むに足らぬ。苦勞が多いのがいけないといふならば、苦勞が無くてもやはり面白くない。慣れてしまへば嫌やになつてしまふ。だから天上界も人間界も共に佛の教に歸依して、さうして自分の骨折が多勢の人の爲に役に立つといふことに喜びを感じるやうにしなければいかぬ。だから佛様は天人師と言つて、天上界の人の先生であり、人間界の先生である。天と人と共に師とすべきものは佛である、斯う言はれるのであります。

第十に「佛世尊」これは一つに言ふのであります。が、「佛」といふのは、この講義を始める一番最初に申したやうに、佛陀といふ言葉は覺者といふ意味で佛といふのは「佛陀」といふ言葉を略して、「佛」と言ふのであります。佛陀といふもとの言葉は覺つ

た者といふ意味です。人生の本當の意味、宇宙萬有の本當の性質を覺り得た者、それが佛即ち覺者であります。その覺者となれば、世の中の者は皆仰ぎ尊ばざるを得ないのでありますから、そこで佛世尊と言ふ、最高の覺りを開いて世の中の一切の者に仰ぎ慕はれるやうになつた者、斯ういふ意味であります。

以上が所謂佛の十號であります。佛様は勿論限り無き徳を具へて居らつしやるのであるが、その佛様を世間の人から仰ぎみて、十の點を見つけて出して、それに就いてお讃め申すのを十號といふのであります。それで斯様にして佛様の徳を稱へるのは、ナニも佛の事を言ふのが目的ではないので、佛と比べて吾々の足らないことを自覺して、その足らない所を直して行くやうにするといふことが目的であります。いつでもさうです、お經を讀んで見て、お經の中に吾々と異つた人のことを讀めてあるのは、その人を

讀めるのが目的ではなくして、これを比べて見てお前の足らない所を反省しろ、斯ういふ意味で勝れた人の事が讀められてあるのであります。佛様の十號といふこともやはりさういふ意味に解釋すれば宜しい。佛になればさういふ徳を皆具へて居らつしやるものだと思はれるのであります。そこで過去の世に於て日月燈明といふ名前の佛様が居らつしやつた。

正法を演説したまふ、初善、中善、後善なり。
(演説正法、初善、中善、後善)

その佛様が正しい法をお説きになる時に、初善、中善、後善であつた、これがかく厄介な言葉であります。「善」といふのは完全無缺な意味、初めお説きになつた事も完全な教であつたが、中頃お説きになつた事も完全な教であつた。最後に、お説きになつた事も完全な教であつた。斯ういふのが初善、中善、後善の意味であります。所が教へる教へ方とし

ては、初めは浅い事を教へるより仕方がない。初めから難しい事を言つてはわかる譯がないから、初めは浅い事を教へて、だんだん深い方に入る。初めは極く初歩のつまらないやうな事を言つて、それから聽く人の力がだんだん増して來れば難しい事も説くといふのが、教育としては相當な方法でせう。それだに初めから完全、中頃も完全、終りも完全といふのはおかしい、どういふ意味だらう。そこに深い意味が有る。私は今の時代の雑誌や新聞や書物などに就いていつも不満に思ふのですが、俗に通ずる、所謂通俗といふことを淺薄なもの、やうに思ふ、これは間違ひです。どうも普通はさう思ふ、世間の人に間にかかる事といふのは淺薄な事だと思ふ、それではいけない。成程言葉に説く所は平易であつても、その平易に説く中に深い意味が籠つて居なければならぬ譯です。そこが大事です。相手が力が無いのだから相手にわかるやうに易しく説くといふことは結

構です。併し易しく説くのはいゝ加減なことではない。説くことは易しく説くけれども、その説く人の意味は本當に深い意味でなければならぬ。深い事を浅く説くのでなければならぬ。それでなければ所謂通俗になりはしない。世間の人の氣に入るやうにいゝ加減な事を言ふならば、それは教でありはしないさういふ點に於て、私は大衆的といふ言葉がモットよく考へられなければならぬと思ふ。この頃は文學でも大衆的の文學とか言つて、大衆といふ言葉を使ひますけれども、大衆的といふことは衆に媚るといふことではない、衆に媚るといふことならば何にもならぬ。衆を教へ導いて、深き高き道に入れるといふこと、それが本當の大衆的である。衆に媚るからぬことではいかぬけれども、わかり易い事を言ひながら、その目的は現在に満足せしめずして、モット高い所に引張つて行くといふのでなければ大衆的の意味にはならない。たゞ衆の好きさうな事を言

ふだけならば、それは教でもなければ道でもない。それであるから極く初歩の事を言ふ時でも、説く人は完全無缺な本當に深い覺りを以て説き、中頃少し善い事を言ふ時でも、説く人は完全な深き覺りを以て説く、後に至つては尙更その通り、初善、中善、後善といふのはそれを言ふ。初めから終ひに至るまで一番善い方法を選んで、そうして最も深い覺りの上に立つて説かれる。それが佛の説法といふものであります。

少し餘計な事を言ふやうですけれども、どうも我國では明治の初め大急ぎで教育制度を變へた。社會情勢などを變へて西洋の學問を取入れた。その癖が残つて居つて、なんでも形式的にいゝ加減におつ附けるやうな氣分がある。だから學校の先生でも、小學校の先生、中學校の先生、大學の先生といふと、小學校の先生が一番下のもので、中學校の先生はそれより上で、大學の先生はモット偉いと思つて居る

随つて小學校ではいゝ加減に教へて、中學校で少し善い事を教へて、大學へ行けばモット善い事を教へると思ふ、これは間違ひである。小學校の子供の時から、本當の力の有る人が本當に善い事を教へなければならぬ。初めだからいゝ加減にして宜い、そんな馬鹿な事はありはしない。私はいつでも言ふ。小學校の先生は大學の先生になれる人がなつて呉れない

この「初善、中善、後善」といふ意味がわかる。初歩の時から完全で、さうして一番終ひまで完全だといふのが、佛様の教の説き方でありますが、世の中の事は皆それではなければいけない譯です。

其の義深遠に、其の語巧妙に、純一無雜にして具足清白、梵行之相なり。

(其義深遠。其語巧妙。純一無雜。具足清白、梵行之相。)

ければいけない。中學校は勿論さうである。力が有り餘つて居なければ初歩の人を教へ導くといふことは出来ない。その代りに又世間でも、小學校の先生だからと言つて馬鹿にしたりしてはいけない。一番下の事をやつて居る人でも、一番上の事をやつて居る人でも同じやうに尊敬するやうにならなければいけない。世の中の仕事は皆さうです。下の仕事をいゝ加減にして置いて上が完全になりはしない。下の仕事が大仕事である。随つて下の仕事をする人を輕んじてはいけない。その意味が本當にわかつて居れば

どんなつまらない事を仰しやつても、その本當の意味を教へて行くといふことが「深遠」です、非常に深く、非常に遠い所まで及ぶやうな完全な教であつて、さうして「其の語巧妙」である。難かしい事を言はれるのだけれども、しかしそれを聴く人にわからないやうに言つたのでは何にもなりませんから、その深い教を、初歩の人にもよくわかるやうにその語は非常に巧みに、うまく衆の心持に入るやうに説かれる。

それから「純一無雜」といふのは、雜りが無いといふことです、衆生を佛にするといふことが佛様の説法の目的でありますから、それより外に何も無い雜りが無い。他の間違つた教などはちつとも入つて居ない。純一無雜である。さうして「具足清白」具足といふのは、あらゆる善い事を實行し得るところの力がその中に具はつて居る。さうして清く白くといふのは、少しもその中に迷ひの道が混つて居ない。教を聽いて迷ふやうではいけない。ところが下手な教を聽くと迷ふのです。甚だ悪い事を言ふやうですけれども、佛教を説く人でも、どうかすると人を迷はせるやうな事を言ふ人がある。それはいけない。本當の教といふものは、迷ひの出来るやうな教ではない。誰にも迷ひを起させないやうな教、それが清白である。さうして「梵行の相なり」梵といふのは清らかといふ意味、迷ひを離れた行ひを産出すべき教であります。それが佛様の本當の教である。

ある。所でこの「梵」といふのは清淨といふ意味でありますが、清淨といふのはどういふ事かといふと、人間が自分を中心に考へたのではどうしても清淨にはなれない。自分の事を考へて居る間は、骨折れば直ぐ報いが来ないし承知しない。自分の事を考へて居る間は、自分が努力してそれが認められないと不平が起る。それでは清淨ではない。であるから本當の清淨といふことは、全く自分を捨てるといふことであつて、初めてそれが本當の清淨になる。「自分が自分」と考へて居る間は、縦ひ世の中の爲に善い事をして、善い事にならない。何故ならいかと嫌やになつてしまふ。それでは本當の善い事にはならない。だからこの清淨といふことは我を捨てることです。自分といふものに執はれる心持を捨てなければ、本當に清淨な行ひといふものは出来るもので

ない。その自分を捨てるといふことが結局自分を大きくする道です。この五尺の體や五十年の命ばかりが自分ではないのである。自分が多勢の爲に骨折つてやれば、その骨折つた結果が悦びになるのだといふことになる。自己といふものが大きくなる。であるから自分を無くするといふことが、それが自分を大きくする道である。そこをいつでも忘れてはいけない。自分を捨てるといふことは畢竟自分を善くする根本である。「俺が〜」と思つて居る間は、その俺がといふのは小さいものであるから、自分を捨て、見る。捨て、見ると自分といふものが大きくなつて来る。モウどこにも障りが無くなつて行く、それを支那の老子が

「無爲にして而して爲さざる無し」

(無爲而無不爲)

と言つて居ります。これはよい言葉であります。何か偉い事をしようナンといふ考が無くなつてしま

ふと、本當に何でも出来るのである。「無爲」といふのは、何か人に讃められるやうな仕事をしたいといふ心持の無くなつた時、さうなると「爲さざる無し」で、どんな事でも出来る。俺が人に讃められた仕事は出来はしない。無爲と言つて、自分といふものを捨て、行く、自分が仕事をしようといふやうな考を無くして行く。さうするとどんな事でも本當に出来る。斯う言つて居りますが、これは非常によい言葉だと思ふ。自分が功を立てよう、自分が讃められようといふ心持のある間は本當の事は出来はしない。さういふ心持を捨てた時に初めてどんな事でも出来て行く、「無爲にして而して爲さざる無し」斯ういふ譯であります。

それが本當の「梵行」清い行ひといふことである自分といふものを捨てた行ひ、それが本當の清い行ひである。さうなつて来て初めて一切の人に仰ぎ慕

はれるやうになつて来る。人に讃められたいと思つて居る間は人は讃めはしない、人に威張りたいと思つて居ると人は立てはしない、何でもないとなつて来た時に、初めてその人のやる事が多勢の手下となつて自然に他の人を動かして行くやうになる。これが非常に大事な事であります。人の上に立つ人は尙更さうであります、己れを示さう、己れを誇らうといふやうな考へでは、逆も人の上に立てるものではない。それを佛教に於ては能く教へて居ります。佛の教は梵行の相である、己れを捨てるといふ清らかな心持になつて、その行ひを形に現したものがそれが佛の教である。斯う言つてあるのであります。それから今度は更に進みまして、さうは言ふものゝ、教を聴く人に程度があるから、その程度に應じて、結局は同じ所に行くのだけれども、初めは浅く説き、その次に中位に説き、最後に深く説いたといふ、佛の説法の順序を述べることになつて参ります。

教報

本部 團報

御會式 十四日第二日曜日午後六時四十分、日蓮聖人非流現談會が、鈴木權大僧正を導師として度修された。御會式といへば萬燈を練つてお祭り願するものゝ多い中に、我等は至誠を捧げて六百五十餘年の往時を追憶し、多難の今日一段と國民教化の實を擧げねばならぬと、七時三十分より教化講演會に移つた。議部理事司會のもとに、和賀義見師及び河合勝明氏の熱辯滿堂を歴し、讀いて『明治天皇御製と四恩の教』と題して井上清純男は一言一句肺腑より出で、更に吾人の胸臆に深い感銘を與へられた。清興として關口錦華、及び松本錦千の兩女史に依つて、佐渡と龍の口御法華の琵琶が夫れ々々彈ぜられ、藝術の方面よりして一段と深く、大聖人を追慕せしめられた。

お互に心を引かれつゝ、散會したのは當に十一時にも垂としてゐた。因に當日参詣の各位へ甘味の御供養をさせて頂いた。

法華經講座と日曜日勤修は例月の通り奉行されつゝある。秋季は一年の中でも最も宗教の情操をそめる期節で、内體上にも精神上にも大に有効に活用したいものと思ひます。善いことは人々にも勤めて皆共に佛道を成じようではありませぬか。



横濱教誌

九月中の當地の集りは左記の如くであつた。

○四日 夜 神奈川區藤原町の西村氏方にて『人生究竟の意義』 磯部先生。

○十一日 夜 中區三吉町伊藤氏方にて。磯部先生

○十三日 午後三時 程谷區峰岡町平岡氏方にて、小西師の御法話。

○廿七日 夜 神奈川區三ツ澤齋藤氏方にて小西師の御法話。

二本松教信

九月十三日 司法保護テにて免因保護事業たる安達傳教慈善會に於ても宣傳のピラを全町に配布し托鉢修行せり。

同 十五日 午後二時二十一分山口一等兵曹の遺骨二本松驛を通し郷里に向ふ因つて出迎讀經す。

同 十九日 午後一時五十七分高橋軍曹外三基の遺骨二本松驛を通す因つて出迎讀經す。

同 廿日 夜 於蓮華寺題目講修行。

同 廿八日 貧困救済事業たる二本松傳教不契會托鉢修行す。

新加盟者

大連市伊勢町 重松弘通殿
 福岡縣八女郡邊春村 大石千尋殿
 本所區小梅町 須藤仙吉殿
 尼崎市東難波村 植村藤次郎殿

(誌友より)

寄附金維持及團費誌料領收

(自九月二十一日
至十月二十日)

一金五圓也	東京 某 氏殿	一金貳圓也	東京 沼部彌太郎殿
一金四拾八錢也	大阪府山乃神傳道閣殿	一金貳圓也	同 小峰 豐子殿
一金五圓也	兵庫縣 笹井 つた殿	一金壹圓也	同 小田五一郎殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣 關 口 誠殿	一金參圓四拾錢也	東京 深澤 紀文殿
一金壹圓貳拾錢也	山形縣 村田 義本殿	一金貳圓貳拾錢也	同 中原 通應殿
一金貳圓五拾錢也	大連 重松 弘通殿	一金貳圓也	甲府 穴山新之助殿
一金壹圓貳拾錢也	萩 岩崎 又雄殿	一金貳圓也	東京 齋藤 義一殿
一金壹圓貳拾錢也	山口縣 野上 重造殿	一金貳圓貳拾錢也	同 遠山 いよ殿
一金貳圓五拾錢也	福岡縣 大石 千尋殿	一金貳拾圓也	同 相良 直一殿
一金壹圓貳拾錢也	東京 佐野 中志殿	一金壹圓貳拾錢也	同 井上道太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	同 高田直三郎殿	一金貳圓也	鹿兒島 高田 貞彌殿
一金貳圓也	同 池澤 泰明殿	一金貳圓也	東京 宇野 博順殿
一金貳圓五拾錢也	東京 須藤 仙吉殿	一金貳圓也	石山 敬殿
一金拾圓也	同 新實徳三郎殿	一金貳圓也	東京 栗山啓五郎殿
		同	伊藤 ナチ殿

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

念 告

從來本部に於ては正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清授相仰き居申候處彌々時代の趨勢に鑑み爰に本團は先づ本誌の増大を圖るに共に正團員と誌友とを區別すべき必要相逼り申候に付本誌巻頭略則御承の上爲法國爲一切衆生可相成團員として何卒御贊助あらんことを偏に奉候候

財團統一團

本多日生上人著書 特價提供

一 聖 語 錄	改 版	特 料 共	全	金壹圓八拾錢
一 日蓮主義本領		特 料 共	全	金貳圓拾錢
一 法華經要義	賜天覽	全	全	金貳圓五拾錢
一 日蓮主義心髓		全	全	金壹圓九拾錢
一 日蓮主義精要		全	全	金貳圓五拾錢
一 佛教の本質と其價值		全	全	金五拾錢
一 法華經要品		全	全	金參圓廿五錢
一 日生上人レコード		全	全	金壹圓七拾錢
一 磯部滿事謹輯		特 料 共	全	金拾錢
一 一本多日生上人		全	全	
一 一動行作法		全	全	

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

一月「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七

「教」

振替東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六ノ一七

財團法人統一出版部

振替東京九四二〇番

統一定價

一册	金貳拾錢	送料壹錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和九年十月廿四日印刷納本
昭和九年十一月一日發行

不許複製

編輯兼 磯部 滿事
印刷人 鈴木 日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都 印刷所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



目次

聖訓摘要	……………	日生上人
日蓮教學講座(第十五回)	……………	河合陟明
法華經講話(第十二講)	……………	小林一郎
記事	……………	小田辰生
○白知工場記	……………	滿田辰生
○皇道と日蓮主義を讀みて	……………	上田辰生
○教報	……………	上田辰生
○寄附團費誌料領收	……………	上田辰生

第三十九年十二月號

昭和九年十二月二十日發行
 第三十九年十一月號